

日宮城跡発掘調査概要

— 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財調査 —

2003年

小杉町教育委員会



日宮城跡 近景（東から）



同 上（南から）



日宮城跡上段平坦面 近景（西から）



同 上 遺構（南西から）



築城時の盛土及び砂土除去後の様子（南東から）



築城時の盛土堆積の様子（上段平坦面と中段切岸部分）



上段平坦面下層で確認された弥生時代の溝（南北試掘トレンチ）



大溝出土の弥生土器

序

小杉町は富山県のほぼ中央にあって、南部には標高117mの高津峰山を主峰とするなだらかな丘陵地帯が北に向かって8kmほど続き、北部には広大な田園地帯が開け、町の中心を南北に流れる下条川は富山湾へ注ぎます。

この地の各所で、旧石器時代から現代にいたるまで連綿とした人々との生活の痕跡を見つけることができます。

日宮城跡は地元では城山とよばれ、富山県の中世史で幾度となく登場し、昭和33年には町指定史跡となっています。

はじめは神保氏の拠点であったとされていますが、衰退後上杉方についた神保覚広や小島職鎮らが在城し、元亀3年(1572)、一向一揆勢に攻められた際、和議を結び、城を明け渡したのちは資料には明確に現れなくなります。

このたびは、個人住宅建築に先立ち城郭の一部でありましたが、初めて発掘することとなりました。

調査では丘陵上の自然地形を巧みに利用した城の様子が窺われ、中世の遺物とともに往時の姿の一端を知ることができました。

こうした調査成果をまとめた本書が、今後の調査研究をすすめるうえでの参考となり、郷土の歴史を知る手がかり及び文化財保護の一助になれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで、終始ご理解・ご協力いただきました地元の皆様をはじめ、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成15年3月

小杉町教育委員会

教育長 稲葉茂樹

例 言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町日宮字寺山地内に所在する町指定史跡日宮城跡の発掘調査概要である。
2. 調査は同地内の民有地にかかる個人住宅建築に先立ち、小杉町教育委員会が個人の依頼を受けて実施した。調査費用については、小杉町が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
3. 調査事務局は小杉町教育委員会生涯学習課に置き、主任 原田義範が調査、課長補佐(文化財保護係長)古城久則(平成13年度)・高橋 登(平成14年度)が事務を担当し、生涯学習課長 御後庄司(平成13年度)・萩野恭一(平成14年度)が総括した。
4. 調査の期間と面積は次のとおりである。

[試掘調査] 平成13(2001)年11月29日～12月27日
平成14(2002)年 1月15日～ 2月22日 対象面積2,204㎡ 発掘面積 246㎡ 実働日数 17日間

[本発掘調査] 平成14(2002)年 8月29日～12月25日
平成15(2003)年 2月24日～ 3月17日 発掘面積1,095㎡ 実働日数 72日間
5. 調査の実施にあたり富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、小杉町文化財審議会から助言、指導を頂いた。また報告書刊行に至るまで次の方々から教示を得た。記して深く謝意を表したい。(敬称略、五十音順)
安念幹倫・池野正男・上野 章・喜多良明・久々忠義・栗山雅夫・佐伯哲也・境 洋子・高岡 徹・竹内和義
林寺巖州・宮田進一・山内賢一
6. 本書掲載の遺物写真は、牛嶋 茂氏(奈良文化財研究所)の指導・協力を得て、杉本和樹氏(西大寺フォト)に撮影をお願いした。
7. 現地調査及び整理作業の従事者は次のとおりである。(五十音順)
[発掘調査] 久野静枝・酒井すず子・酒井義雄・土田ユキ子・坪田和子・安田久実代・山口チズ子
[遺物整理] 金瀬ますみ・吉島正喜・開 一美・堀埜実津子・安田久実代・吉沢泰子

凡 例

1. 本書の水平基準は海拔高、第4図・第5図を除く位置図及び遺構図の方位は座標北を示す。また、第11図日宮城跡本発掘調査遺構図には日本測地系と世界測地系の座標値を併記している。
2. グリッド杭の座標値(世界測地系)は下記のとおりである。
 $X25 Y35 = X78180.000 Y - 7200.000$ $X35 Y35 = X78200.000 Y - 7200.000$
3. 遺構の分類記号はSD:溝、SK:土坑、SX:不詳遺構の呼称を踏襲した。
4. 図版の縮尺は遺構図が1/80、遺物実測図が1/4を基本とした。遺物写真図版は任意の縮尺である。
5. 土器の断面は、須恵器・珠洲を黒塗りとし、他の土器は白抜きとした。また、遺物実測図中の網点等の表示は下記の表現として用いた。



6. 土層図中の色調は、小山正忠・竹原秀雄編1967『新版標準土色帖』(財)日本色彩研究所の表記を用い、土色の測定には土色計(第一合成社製 SCR-1)を使用した。
7. 調査で得た図面・写真・遺物は小杉町教育委員会で保管し、出土遺物には遺跡名をHMYの略号で記入している。

目 次

I 位置と歴史的環境	1
II 調査に至る経緯	6
III 調査の概要	10
〈引用参考文献〉	37

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	1
第2図 『日宮新村見取絵図』	2
第3図 調査地と太閤山団地造成前の地形	3
第4図 新川縣下第十四大区小四区越中國射水郡日宮新村地引繪圖	4
第5図 射水郡橋下條村道路線認定平面図	5
第6図 試掘トレンチ配置図	7
第7図 日宮城跡周辺の旧地形	8
第8図 日宮城跡平面図	9
第9図 発掘区区割りと呼称	9
第10図 日宮城跡現況測量図	12
第11図 日宮城跡本発掘調査遺構図	13
第12図 上段切岸・二の丸付近の遺構配置図	15
第13図 上段切岸・二の丸付近の土層図、SK03遺構図	16
第14図 上段平坦面の遺構配置図と土層図	18
第15図 上段平坦面の遺構図 (SD31・37・52, SK47・51, SX16・17)	19
第16図 上段平坦面の遺構図 (SD05・24・46・48・59, SK20・38・50・57・58・68, SX56)	20
第17図 上段平坦面の遺構・土層図 (SD05・13・46・59, SK20・38・43・50・57・58・68)	21
第18図 上段平坦面の遺構図 (SK06~08・12・18・21・22・25~27・33~36・40~42・44・45・53・61)	22
第19図 上段平坦面の遺構図 (SD02・39, SK09・28・50・54・55・60・63・65・68・69・SX29・30・62・66)	23
第20図 城郭盛土下層の遺構配置図	24
第21図 城郭盛土下層の遺構図 (SK71~85, SX70・86)	25
第22図 下層の遺構配置図と遺構図 (SK87・88)	26
第23図 試掘調査の出土遺物 (南北トレンチ大溝内)	28
第24図 試掘調査の出土遺物 (南北トレンチ大溝内)	29
第25図 試掘調査の出土遺物 (南北トレンチ斜面・4トレンチ大溝内)	30
第26図 試掘調査の出土遺物 (4トレンチ大溝内・その他のトレンチ)	31
第27図 遺構の出土遺物	32
第28図 遺構と遺構外の出土遺物	33
第29図 遺構外の出土遺物	34
第30図 遺構外の出土遺物	35
第31図 城郭盛土及び下層の出土遺物	36
第32図 城郭盛土及び下層の出土遺物	37

写真図版目次

卷頭図版 1	日宮城跡近景	
卷頭図版 2	日宮城跡上段平坦面と遺構	
卷頭図版 3	築城時の盛土及び下層土除去後の様子	
卷頭図版 4	上段平坦面下層で確認された弥生時代の大溝と出土遺物	
図版 1	日宮城跡付近航空写真	45
図版 2	試掘調査	46
図版 3	発掘区近景・上段切岸発掘区	47
図版 4	二の丸付近の発掘区；上段平坦面と下層遺構	48
図版 5	試掘調査の出土遺物（弥生土器）	49
図版 6	試掘調査の出土遺物（弥生土器）	50
図版 7	試掘調査の出土遺物（弥生土器）	51
図版 8	本調査出土遺物（金属製品）	52
図版 9	本調査出土遺物（土製品・石製品・金属製品）	53
図版 10	本調査出土遺物（中世土師器皿・中世、近世陶器・磁器）	54

表 目 次

第 1 表	遺構一覧	27
第 2 表	出土遺物観察表	38～44

報告書抄録

ふりがな	ひのみやじょうあととはくつちょうさがいよう							
書 名	日宮城跡発掘調査概要							
副 書 名	— 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財調査 —							
編 著 者 名	原田 義範							
編 集 機 関	小杉町教育委員会							
所 在 地	〒939-0393 富山県射水郡小杉町戸破1511 TEL 0766-56-1511							
発 行 年 月 日	西暦 2003 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	。、”	。、”		m ²	
ひのみやじょうあと 日宮城跡	いみず ことぎ 射水郡小杉町 ひのみや てらやま 日宮字寺山 108 外	16381	089	36 度 42 分 10 秒	137 度 05 分 20 秒	20011129～ 20020222 20020829～ 20021225 20030224～ 20030317	246 1,095	個人住宅 建築に先 立つ調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
日宮城跡	集 落	弥生時代後期		溝・焼壁土坑・土坑		弥生土器・土師器		
	散布地	古代				須恵器		
	城 館	中世（戦国時代）		切岸・曲輪・集石遺構 溝・焼土		中世土師器(皿)・刀子・かんざし 砥石・陶錘・唐津・越中瀬戸		

I 位置と歴史的環境

1 位 置

立 地（第3図）日宮城跡は射水平野と接する射水丘陵先端部に位置し、標高は城跡の最も高い所で 29.6m あり、北西側に広がる水田とは 21m 前後の比高差となる。南東側に連なっていた丘陵地帯は、昭和 39 年から昭和 54 年まで行なわれた『太閤山ニュータウン建設事業』の造成工事により、平坦な住宅地へと変貌を遂げている。

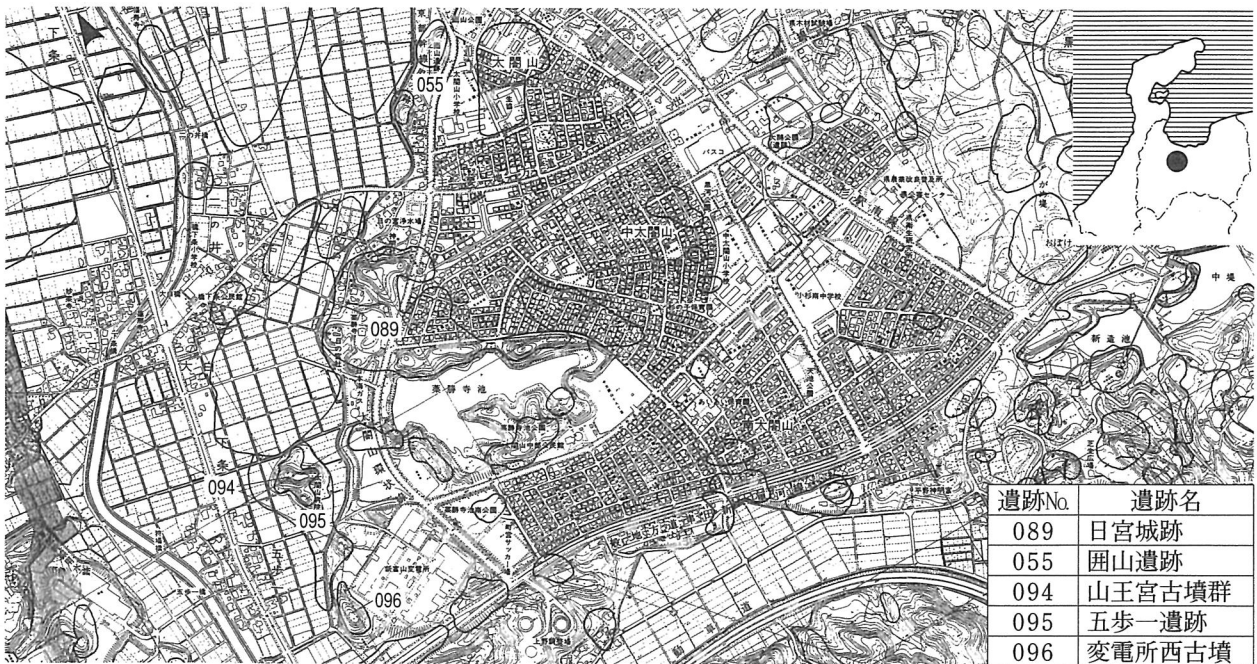
造成前の地形図から城跡の周囲を概観すると、城郭の南東側に沿うように幅 50~80m の谷間が東西方向に約 300m 入り込んでいる。この谷間は「フケ」と呼ばれる沼状の軟弱な地盤を水田として利用しており、東側の幅 20~150m 南東方向約 1.5km の谷筋も同様に軟弱であったことから自然な要害の役割を果たしていたとも考えられる。

城跡から北方向約 120m 先には東西に横切る現在の県道富山・戸出・小矢部線を見下ろすことができる。中世から近世初期の北陸道は富山湾沿いの浜街道であったが、眼下の道は脇街道（山街道）として利用されていた。城跡から約 2km 西にある水戸田（大門町）は浜街道に向かう分岐点、また東の富山へ向かう約 2.2km 先の黒河（小杉町）は長沢（婦中町）を経て飛騨へ抜ける街道の分岐点となっていて、陸路で能登・加賀方面から山街道を通り越後または飛騨方面へ行き交う人々の流れを監視できる絶好の位置であったといえる。

城の北西方向 600m 先に見える下条川は、町域の中心を南北に流れ放生津湯（富山湾）に注いでいる。戦前の自動車輸送が発達するまで木材や米、生活用品等を運ぶ重要な水路として使用されていた。戦国時代にもこの水運を利用して人や物資が流通していたことが充分推察できる。また下条川の河口には放生津城（新湊市）、その周辺には古国府（高岡市）や守山城（高岡市）があり、上流の浄土寺（小杉町）からは谷間の陸路を進み、尾根越えするとおよそ 2km で増山城（砺波市）にたどり着くことができる位置であったことから、水運を利用した各城の中継点としての役割を担っていたと考えられている。

周辺の遺跡（第1図）下条川流域は縄文時代から中世にいたる多くの遺跡が確認されており、いずれの時代であっても人々の暮らしと水との関わりが重要であったことを窺い知ることができる。

日宮城跡周辺の丘陵先端部には、方形周溝墓や土壇墓が見つかった県指定史跡の囲山遺跡をはじめ、変電所西・五歩一・山王宮・宿屋などの古墳が点在しており、この流域の集落の実態や首長墓の変遷の解明が待たれる地域である。



第1図 周辺の遺跡（1：20,000）

2 歴史的環境

概要 日宮城(火宮城)は、15世紀中頃から畠山氏の守護代として射水・婦負二郡を支配していた神保氏の支城であった。神保長職^{ながもと}の時期には、本城は上杉謙信の勢力下にある富山城にあり、放生津・守山・増山などにも支城をもっていた。日宮城はこれらの支城を結ぶ中継点として重要な役割を果たしていた。神保長職没後、越中の東半分を制圧した上杉方にとって日宮城は越中における西方進出の最前線となっていた。城将は長職旧家臣の神保覚広^{ただひろ}・小嶋職鎮^{もとしげ}・安藤職張・水越職勝であったと言われる。

元龜三年(1572)武田信玄と結ぶ加賀越中の一向一揆が砺波郡より東進し、日宮城に迫った。最大の危機を向かえた城中では、新庄城(富山市)にいる上杉家臣の鯉坂長実^{こさかながね}に援軍要請を懇願した。鯉坂は魚津城に在城する河田長親と談合し援軍を送ることになるが、一向一揆の勢力の前に城将らは和談、戦わずして城から退去し石動山などへ逃亡している。この後東進を続けた一揆勢は神通川渡場で交戦し、上杉勢を敗北へと追い込んでいる。

規模と構造(第7図) 日宮城跡は高樹文庫所蔵の「日宮新村見取絵図」文化九年(1812)に描かれている。この絵図からは本丸と二丸が丘陵上にあった様子と薬勝寺・日宮社・六ヶ村用水(六箇用水)・村落への道などの位置関係を把握することができる。造成前の地形図を比べてみると絵図の縮尺は不明確であるが、位置関係はほぼ正確に描かれていることがわかる。

現在、二丸の在った場所については、絵図の本丸と二丸間に描かれている南北の道筋が何処を通過していたかで二通りの解釈がなされている。一つは本丸のある丘陵中の山道とする考えで、第7図の日宮城跡平面図(縄張り図)のように二丸の位置は本丸に続く丘陵中の東に張り出した頂部となっている。もう一方の見方は本丸のある丘陵と団地造成で消滅した東の独立した小丘陵間の谷筋の道を示めすとし、小丘陵上に二丸が配置されていたとする考え方である。

いずれの説が当時の日宮城の姿を表しているのかは、前述の頂部が住宅団地造成の道路工事によって大半が失われ、後述の小丘陵は宅地となり消滅したため、今では現地での検証は不可能である。

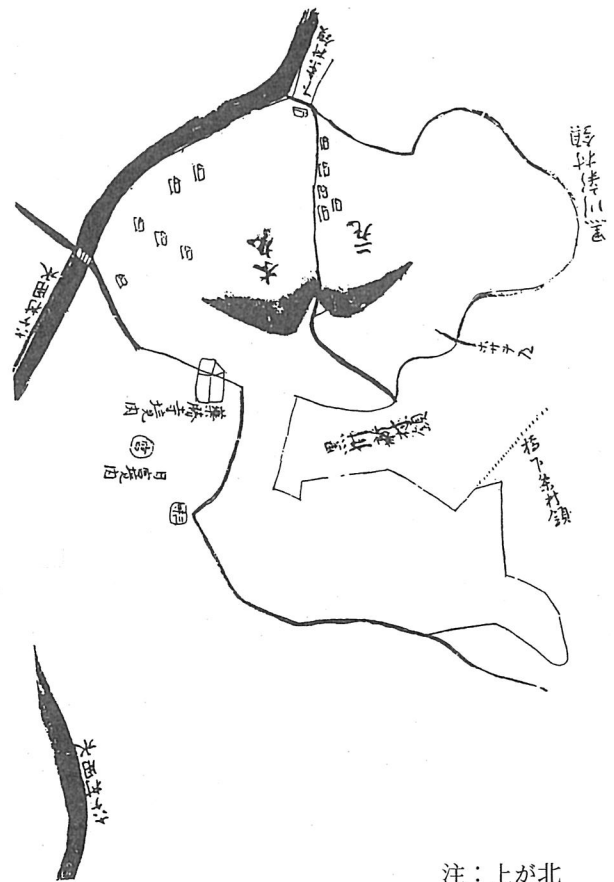
城跡の規模等は越中古城記(加越能文庫)に次の記載がある。

一 日宮古城

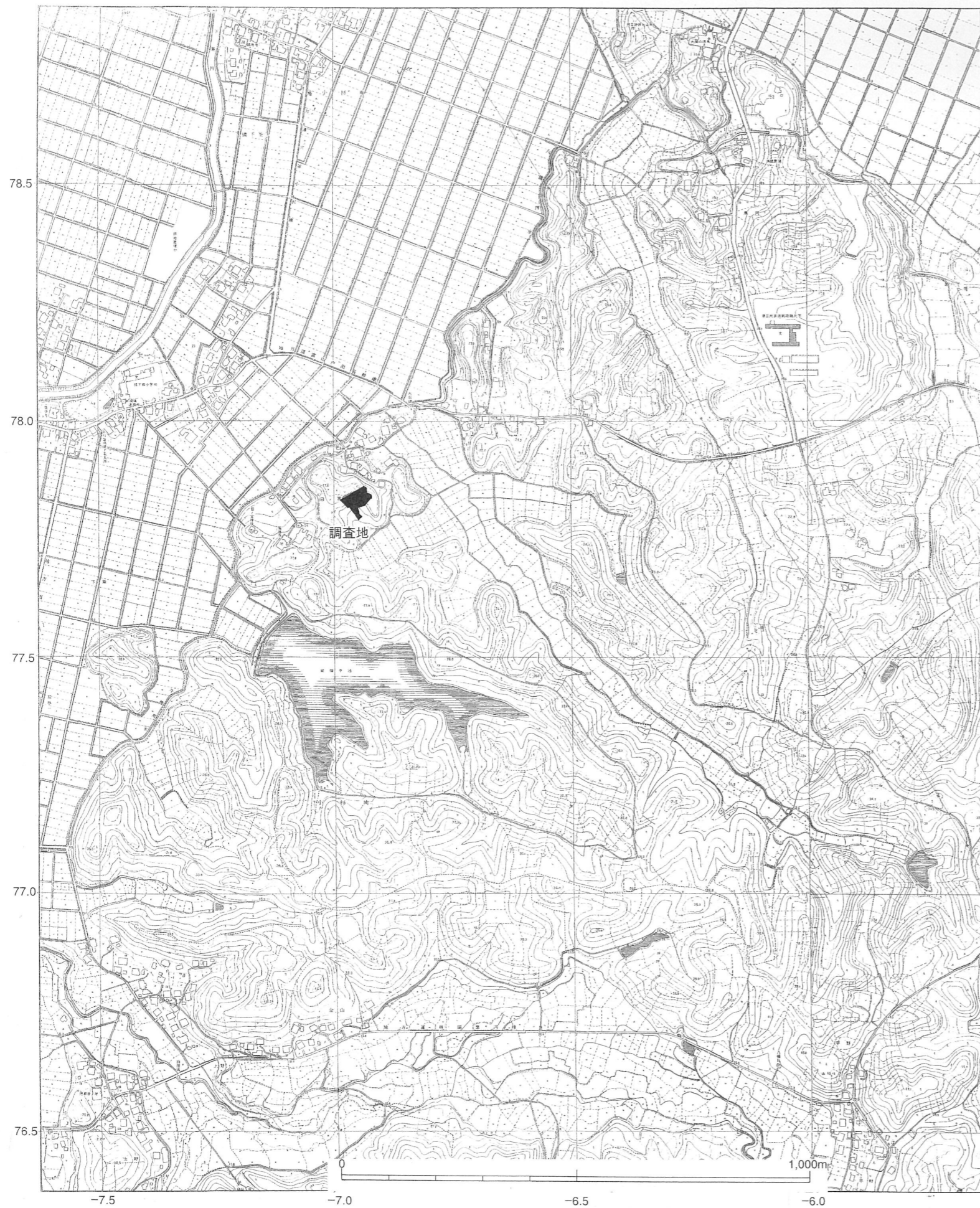
「橋之下条村領、本丸東西貳拾壹間、南北七間、南ノ丸東西拾六間、南北貳拾貳間、南之方ニ小嶋屋敷・寺嶋屋敷与申所有、城主神保長職家老小嶋甚助・寺嶋牛之助同居之由、天正年中上杉謙信公越中江発向之節落城之由」

これによると本丸の最上段は37.8×12.6m、南ノ丸(二丸)は28.8×39.6mで南方に家臣の小嶋・寺嶋の屋敷があったとされる。家臣の屋敷は薬勝寺の南西に隣接する平坦地とその西側にある墓地の平坦地であったと考えられている。

現存する本丸跡は4段の平坦面で構成され、最上段が東西約40m南北8~17mの広さを有し、その下段の平坦面は、最上段の平坦面を囲むように最大幅で約10mの平坦面が巡る。一段下には南と東側で「L」字状の最大幅10m前後の平坦面があり、その下段が最も下の平坦地となる。各平坦面は切岸を巡らす形で守りを固めていたと考えられる。



注：上が北
第2図 『日宮新村見取絵図』 (高樹文庫蔵)



注：この図の等高線は現在の地形図の標高より2m低く表示されている

第3図 調査地と太閤山団地造成前の地形（1：10,000）



第4図 新川縣下第十四大區小四區越中國射水郡日宮新村地引繪圖

注：網点部分が調査対象地

射水郡橋下條村道路線認定平面圖



第5図 射水郡橋下條村道路線認定平面圖

注：()内の文字は原図には記されていないが便宜上加筆したものの

Ⅱ 調査に至る経緯

1 指定史跡に至る経過

昭和 25 年文化財保護法が公布され、この法律に基づき、昭和 33 年 8 月 3 日に小杉町内に残る文化財の保存活用を目的とする『小杉町文化財保護条例』が公布・施行されている。この条例制定にあたっては事前に、当時指定のために各地区や所有者等から 150 件ほどの候補が寄せられ、調査や鑑定が行なわれている。この結果を受けて、同年10月に建造物 1 棟、彫刻 5 点、工芸品 3 点、史跡 12 件、名勝 3 件の併せて 24 物件が初の指定となった。

日宮城跡は地元では「城山」と呼ばれ、町唯一の城跡として当初の指定(町指定史跡第 4 号)を受けている。当時の申請では、日宮地内の山本正次氏が管理者で指定地は代表地番 1 筆のみの記載となっていた。また城跡の範囲についても明示した図面等はなく、城郭の構造などを解明する調査が行なわれた記録も見当たらないことから古文書等の文献に残る史実から指定に至ったと考えられる。現在では史跡を指定する場合、公有地化が図られていくことになるが当時は民地のまま指定され今日に至っている。

2 事前協議

平成 11 年 10 月、建築主から依頼を受けた設計業者が建築予定地及び周辺の埋蔵文化財包蔵地の確認に来庁している。町教委では周知の埋蔵文化財包蔵地(日宮城跡)内での計画であれば文化財保護法に基づく届出及び事前調査等が必要な旨を伝えている。

翌年 2 月 25 日、原因者から具体化した設計図面を添付した届出の提出を受けたが、予定地は日宮城跡の本丸を巡る最下段とその上段の切岸(急傾斜)と史跡指定地番をも含む約 2,000 m²の敷地内での建築計画となっていた。

このため小杉町では史跡の取扱いについて検討を行ない、城跡を現状保存することを前提とした交渉を原因者で行なう方針が決定した。交渉は町有地との代替案や建築予定地の買収案等をもとに平成 13 年 5 月 23 日まで十数回続けられたが、日宮城跡の現状保存への協力と理解を得ることができなかった。

平成 13 年 6 月 7 日、原因者から住宅建築に伴ない指定史跡の現状変更届が提出された。6 月 13 日にはこれを受けて町文化財審議会が開催され、これまでの交渉過程や現状変更届の取扱いについて協議がなされている。

この後、町教委は審議会の意見等を含め、建築主に対して建築に際し遺構への影響を最小限に留める工事を行なうよう理解を求め、調査費を確保したのち試掘調査を実施し、その結果に基づき具体的な設計変更協議を開始することを確認した。

3 試掘調査(第 6 図)

調査は平成 13 年 11 月 19 日から現況図作成のため、ラジコンヘリコプターを用いた空撮による地形測量を行ない、計画地とその周辺を含む約 5,000 m²を図化範囲とし、縮尺 1/200(等高線 25cm)の測量作業に入った。

空撮後の 29 日からはバックホーでトレンチ設定位置の枯れ草及び樹根等の表層土を除去し、その後人力で試掘トレンチの掘削を開始した。試掘トレンチの配置は、上段の切岸から最下段の平坦面に及ぶ幅約 1～2m の 2 トレンチ(南北トレンチ)と上段切岸下の平坦面中央に幅約 3.5m で東西方向に設定した 1 トレンチ、二の丸方向に向かう尾根沿いから頂部にかけて幅 2m で設定した 3 トレンチ、平坦面の 1 トレンチ掘削後に中程と東端にそれぞれ 4・5 トレンチを設定して城郭遺構下層の調査を実施した。調査は積雪の状況を勘案しながら翌年 2 月 22 日まで続けられ、延べ 17 日間を要している。この後、図化作業等の整理を 4 月 3 日まで行なっている。

調査の結果、戦国時代頃の土師器皿が築城時に平坦面を造り出すために行なった盛土直上から数点出土した。また、平坦面下では弥生土器が大量に埋まった幅 3.5m 深さ 2.5m の大溝が発見されている。

大溝掘削や築城による丘陵の改変の様子は、2 トレンチの土層の平坦面から南の切岸部分にかけての土砂堆積状況

で推察することができる。上からⅠ層が黒茶褐色の表土(約30~60cm)、Ⅱ層が黄灰褐色の築城時の盛土(約0~90cm)、Ⅲ層は暗褐色の大溝構築以降から築城前までの堆積土(約20~40cm)、Ⅳ層は明黄褐色の弥生時代の丘陵及び大溝掘削時の排出土の堆積層(0~1.2m)、Ⅴ層が暗黒色のⅣ層堆積以前の表層土(20~35cm)、Ⅵ層は淡黒色土(20~85cm)Ⅶ層が黄茶褐色土の地山に大別される。

これらの状況から日宮城跡の本丸があった丘陵東側斜面は、弥生時代に山腹を削り造り出した平坦地に大溝を巡らすように掘り込み、一連の掘削で排出した土砂を下方の斜面に捨て、その堆積によって広がりのある緩やかな斜面が出来上がったと考えられる。築城時には、弥生時代の改変を受けた丘陵の段状地形を巧みに利用しながら再成形したと見られる。

4 試掘後の再協議と設計変更

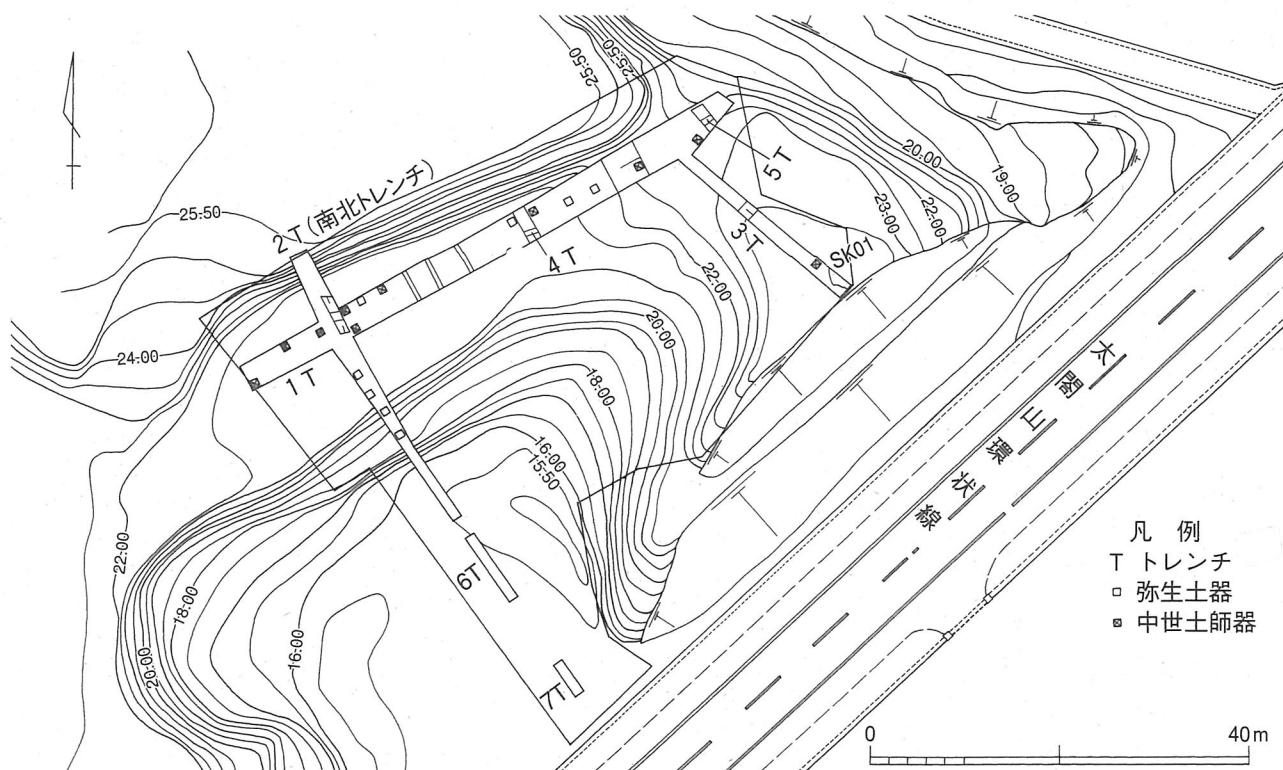
平成14年6月、原因者に対して3月に行なった町文化財審議会での試掘調査中間報告及び5月の現地視察等を踏まえ試掘結果を報告している。この報告では建築計画地には城跡の遺構が良好に残っていたことや新発見となる弥生時代の大溝や土器が大量に出土している点を説明して、現状保存の協力を再度打診した。しかし、建築実施への意思は固く、設計変更による遺跡の保護策を執らざるを得なかった。

数度の設計協議を重ねた結果、敷地内の北西にある上段切岸の保存と家屋掘削工事を極力避ける工法変更への理解を得て、止むを得ず遺構に影響の及ぶ部分については本発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

5 本発掘調査

調査は、母屋及びその周囲で遺構に影響が及ぶ約500㎡を対象としていたが、盛土により地形が改変する部分の除草・伐根後の地形測量や、母屋にかかる下層の弥生時代の遺構検出等を実施したため、地形測量を含めた記録保存の面積は2倍の1,095㎡となった。このため国庫補助事業の計画変更申請を行ない、増額により調査を進めている。

現地調査は平成14年8月29日から同年12月25日(実働58日間)まで城跡の発掘を実施し、翌年2月24日から3月17日(実働14日間)まで下層の遺構検出を行ない、日宮城跡の発掘調査を終了した。



第6図 試掘トレンチ配置図(1:800)

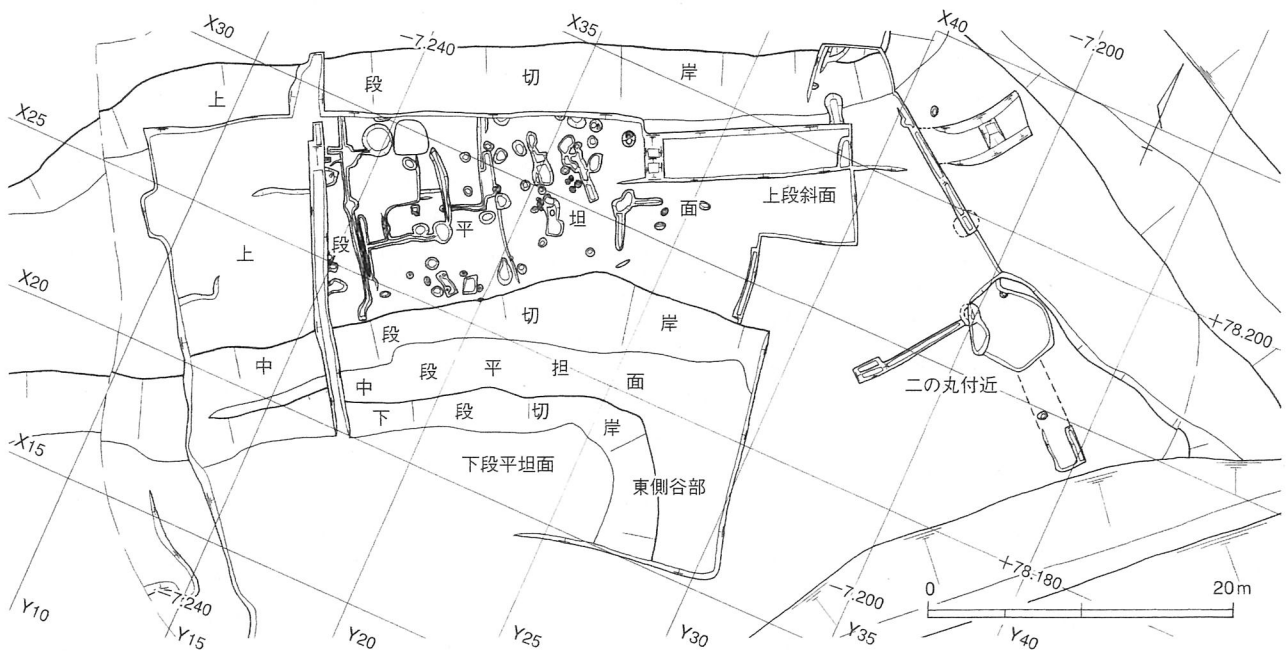


第7図 日宮城跡周辺の旧地形（1：500）

注：この図の等高線は現在の地形図の標高より2m低く表示されている



第8図 日宮城跡平面図 (1 : 2,000)



第9図 発掘区区割りと呼称 (1 : 500)

Ⅲ 調査の概要

1 調査方法と範囲(第8・9図)

調査は平成4年2月、山内賢一・久々忠義の両氏が作成した第8図の日宮城跡平面図(縄張り図)を参考とし、本丸及び二の丸の位置関係もこの図の解釈に拠った。今回の調査地は、本丸の南東側斜面と二の丸推定地の尾根沿いから頂部にかけてである。本丸の最上段平坦地(主郭)の南東側には4段の切岸が構築されているが、調査地内には主郭を囲む切岸を1段目とすると3・4段目の切岸が存在する。本書の調査では便宜上3段目の切岸を上段切岸、その下に巡る平坦面(郭)を上段平坦面、4段目の切岸は一部に平坦面を伴うため、これを中段平坦面とし、上方の切岸を中段切岸、下方を下段切岸として扱っている。また、最下の平坦地は下段平坦面とした。

調査開始にあたっては、まず開発敷地とその周辺約2,900㎡の除草及び低木樹の伐採・集草・搬出を行なった後、バックホーで表層土及び樹根のすきとりを実施した。その後の人力による掘削は、3年前まで対象地が鬱蒼とした竹林であったため、その伐根作業に多くの時間を費やしている。

発掘調査は敷地内への進入路や池などの外構と母屋建築工事で掘削が遺構に影響を及ぼす範囲に限定した。また、離れ建設予定地など盛土施行で遺構に影響が及ばないと判断できる範囲については、竹根混じりの表層土を除去し地形測量だけを実施した。調査方法の区分とその範囲は次のとおりである。

[地形測量調査] 上段切岸(X25～37Y6～26区)・二の丸付近(X20～39Y28～42区)

[発掘調査] 二の丸付近(X31～33Y35・36区)・上段斜面(X29～36Y25～30区)・上段平坦面(X20～32Y8～32区)
中段切岸(X19～28Y12～28区)・中段平坦面(X19～27Y13～28区)・下段切岸(X18～24Y13～26区)
東側谷部(X20～26Y26～30区)・下段平坦面(X17～22Y14～25区)

また、城郭遺構下層の発掘調査は上段平坦面の一部と中段切岸から下段切岸にかかる母屋部分(X20～28Y18～27区)と進入路(X18～24Y10～17区)で行ない、弥生時代の丘陵改変で堆積した盛土上の遺構検出を実施している。

2 層 序

調査区の層序はⅡ章3 試掘調査で南北試掘トレンチの土層で概観しているが、対象地内の堆積状況は一様ではない。堆積の変化を面的に観察すると築城時の盛土範囲は、Y13～24区の上段平坦面から中段切岸にかけてである。

Y13以西は第22図A-A' セクションの②層下に築城時の堆積土(Ⅱ層土)や弥生時代の改変時盛土(Ⅳ層)は見られず、上から表土(Ⅰ層)、大溝構築以降から築城前までの堆積土(Ⅲ層)、弥生改変前の表層土(Ⅴ層)の堆積順となる。

Ⅴ層の暗黒色土は前述の進入路予定地で掘下げを行なったところ、X22Y10付近で一部露頭し、その堆積状況を示すラインが東側下段平坦面まで斜行している(巻頭図版3)ことが確認されている。このことからまた上段平坦面北西端のX23～27Y8～10付近でも同様であるが、表土(Ⅰ層)下のⅢ層土を削り平坦に成形したとも考えられる。Y30以東の尾根沿いから二の丸付近にかけては、わずかな地形の改変に留まっている。

東側谷部の土層は、X24以南では谷を埋め尽くした自然堆積の様子が窺えるが、X24以北から中段切岸にかけては自然堆積した黒色土上に弥生時代の改変時土砂が、最大で1.2m程堆積している。

なお、下段平坦面は現在東を走る太閤山環状線の道路高と同じになっているが、試掘調査で2 トレンチを設定したところ現況地盤から最大で約2.5mの盛土がなされてあった。この搬入土は、昭和49～51年にかけての太閤山団地造成時に、丘陵地を切土した山土砂(明黄褐色粘質土)が用いられたと考えられ、以前の地形は沼状の軟弱な地盤であったと見られる。

3 城の遺構

上段切岸の遺構(第6・11~13図第1・2表)

上段切岸は南西端から北東角までの長さが65.8m、南北試掘トレンチ(2T)を設定した箇所勾配53度、傾斜面の長さ5.2m、高低差4.2m、北東角(第12図A-A')で勾配34.5度、傾斜面の長さ3.67m、高低差2.1mを測る。

遺構はSK01・SD02で、SK01は時期不詳の攪乱土坑、SD02は上段切岸下部を掘り抜き上段斜面へ続き、底面は平らでほぼ水平を保っている。遺物は中世土師器の皿が出土している。

二の丸付近の遺構(第11・12図第1・2表)

二の丸付近(第8図B)は、丘陵頂部の東西方向(北辺)に長さ18m(以東は開発により消滅)、南北方向(西辺)で長さ3.2mまで切土し、平坦面を区画するために段を造り出した痕跡が見られる。

北辺と西辺角付近の勾配は22.5度、傾斜面の長さ0.9m、高低差0.46mを測る。遺存する平坦面の広さは約55m²である。第7図の尾根地形から推定すると消失前の面積は遺存する面積の2~3倍あったと考えられる。

二の丸付近では弥生時代の土坑SK03・04の2基を検出した。SK03の西側半分は未掘であるが隅丸方形の土坑で覆土から弥生土器の甕が出土している。SK04はサブトレンチ1で確認された円形状の土坑で弥生土器の高杯1点が出土した。

上段平坦面の遺構(第14~19図第1・2表)

上段平坦面は長辺を上段切岸の南西端から北東角まで、短辺を中段切岸までの長さとする約720m²の広さとなる。このうち発掘対象面積は約500m²であった。

遺構はY14~24区の平坦に造成された範囲に集中し、遺構覆土からは弥生土器の小破片の出土が見られ、いずれも築城時の地形改変に伴う混入と考えられる。

検出された溝にはSD48やその東側には逆「L」字状にまわるSD46・05などがある。

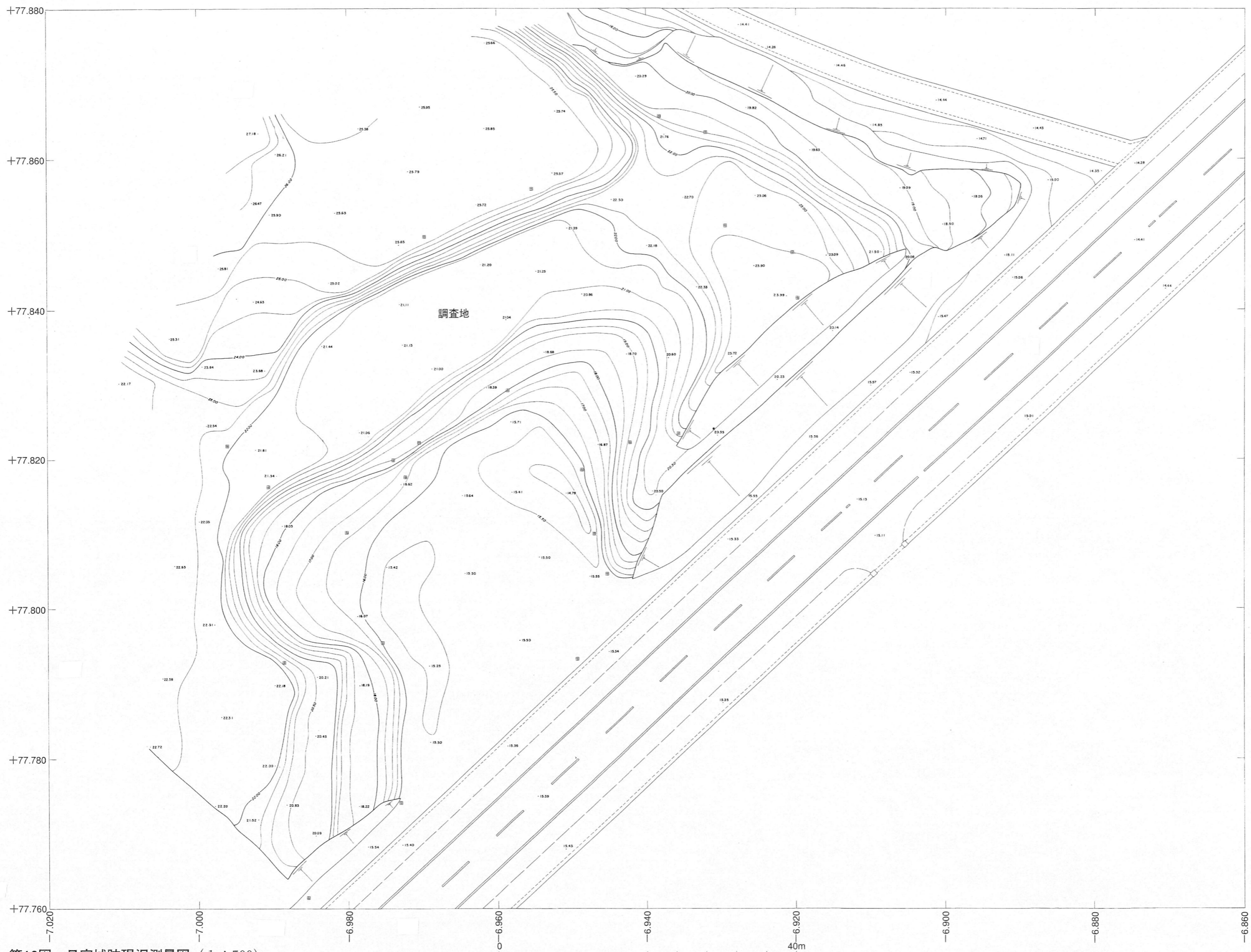
SD48・46の上段切岸斜面下と平坦の境目となる縁沿いには、試掘調査の南北トレンチ(2T)掘削時に、幅20cm、深さ5cmの溝が見つかり、切岸傾斜面に降った雨水などを受ける機能をもつと考えられていた。SD48の北端はこの溝まで続き、雨水などを中段切岸まで排水する用途があったと見られる。SD46も中段切岸まで達していないが同様の機能があったと考えられる。

SD48・46の配置は、上段切岸直下で確認された握拳半分ほどの大きさの自然礫を一辺約2.5mに敷き詰めたSX17を中心に左右等間隔に掘り込まれており、何らかの区画を意図として造られたと見られる。また、SX17の東南角付近からのびる逆「L」字状のSD05は、SX17に付随する溝またはSD46と同様な形態から関連する溝と考えられる。中世土師器の皿1点が出土している。

SX17の構造は方形で厚さ約5cmに自然礫が敷き詰められ、やや南よりの中央部に長さ52cm、幅30cmの半分打ち欠いた自然石が置かれていた。この石は、欠いて平にした面を上向きにして自然礫面と同一の高さになるように埋め込まれていて、自然礫とともに被熱痕が見られた。また、自然礫の南辺に接する土坑の覆土上層には木炭の細片が多く混在していた。西辺に隣接するSK47はその配置状況と出土遺物からSX17に関連する遺構と考えたいが、覆土の堆積状況からみると同時期だとは断定できなかった。

SX17から南東方向に8mほど離れた中段切岸に至る付近で同様な形態と見られるSX16を検出している。自然礫の敷き詰め範囲はSX17のように方形には遺存していないが、長さ3m、幅1mの範囲で確認されている。礫の東側に付随する土坑は、上層覆土に多量の焼土ブロックが混まじり、中世土師器の皿十数点が出土している。

この二つの遺構は、いずれも火を取り扱う施設であったと考えられ、とくにSX17は前述のとおりSD48・46の排水溝を配し、中央部に台として利用できる大きさの石が配置されていたことなどから、炊事場などの作業場的な用途が



第10図 日宮城跡現況測量図 (1:500)



第11図 日宮城跡本発掘調査遺構図 (1:500)

推定される。

上段平坦面は上段斜面に向かい最大で幅1mほど広がると見られるが、今回の発掘区の平坦面で土坑や柱穴状ピットはほぼすべて検出できたと考えている。しかし、掘立柱建物が想定される土坑の明確な配列などは確認されなかった。

このことは、第8図の平面図(縄張り図)に示されているように今回の発掘区から10mほど西側に離れた場所に一辺が約20m四方の一段高まりのある平坦地が存在することから、上段平坦面に掘立柱建物などの施設が不要だったと見ることもできる。

また、上段平坦面と中段斜面の境には防御用の柵を築いた痕跡を示す小穴の配列も確認されなかった。

中段切岸(第8・11図)

中段切岸は南西端から北東端の直線的な構築面で61m、南北試掘トレンチ(2T)を設定した箇所を勾配30度、傾斜面の長さ3.2m、高低差1.6mを測る。発掘範囲は北東端から38.8mまでで、37.5m以西では中段平坦面が途絶え、中段斜面と下段斜面の区別が無くなる。

中段平坦面(第8・11図)

中段平坦面は幅4m前後、長さ31mの傾斜を伴う平坦地で広さは約124㎡であり、検出遺構はない。

下段切岸(第8・11図)

下段切岸は北東端から29.2mまで構築され、南西端では中段切岸と一体となり、西へ23.5mまで直線的に続き、南に向かい屈曲する。

下段平坦面と東側谷部(第8・9・11図)

下段平坦面は南北試掘トレンチ(2T)の断面土層から南に向かい緩やかに低くなる様子が一部で観察できたが、太閤山団地造成時と考えられる土砂搬入により堆積層に攪乱がみられた。造成前の地形図では、この平坦地から南方30～50mは湿地の様相を呈していたことがわかる。

谷部から東側尾根に至る斜面は急傾斜で自然の要害の機能を果していたと考えられ、発掘区南壁の土層観察でも人工的な改変の様子は見られなかった。

4 城郭盛土下層の遺構

下層調査は、造成での掘削が遺構に影響が及ぶ範囲で実施したため、X20～30Y17～29区の住宅建築部分とX19～23Y10～16区にかかる進入道の二箇所となった。ただし、南北試掘トレンチ(2T)と4トレンチで確認された弥生時代の大溝の方向を確認するために上段切岸と二の丸に至る東西方向にサブトレンチ2を設定している。

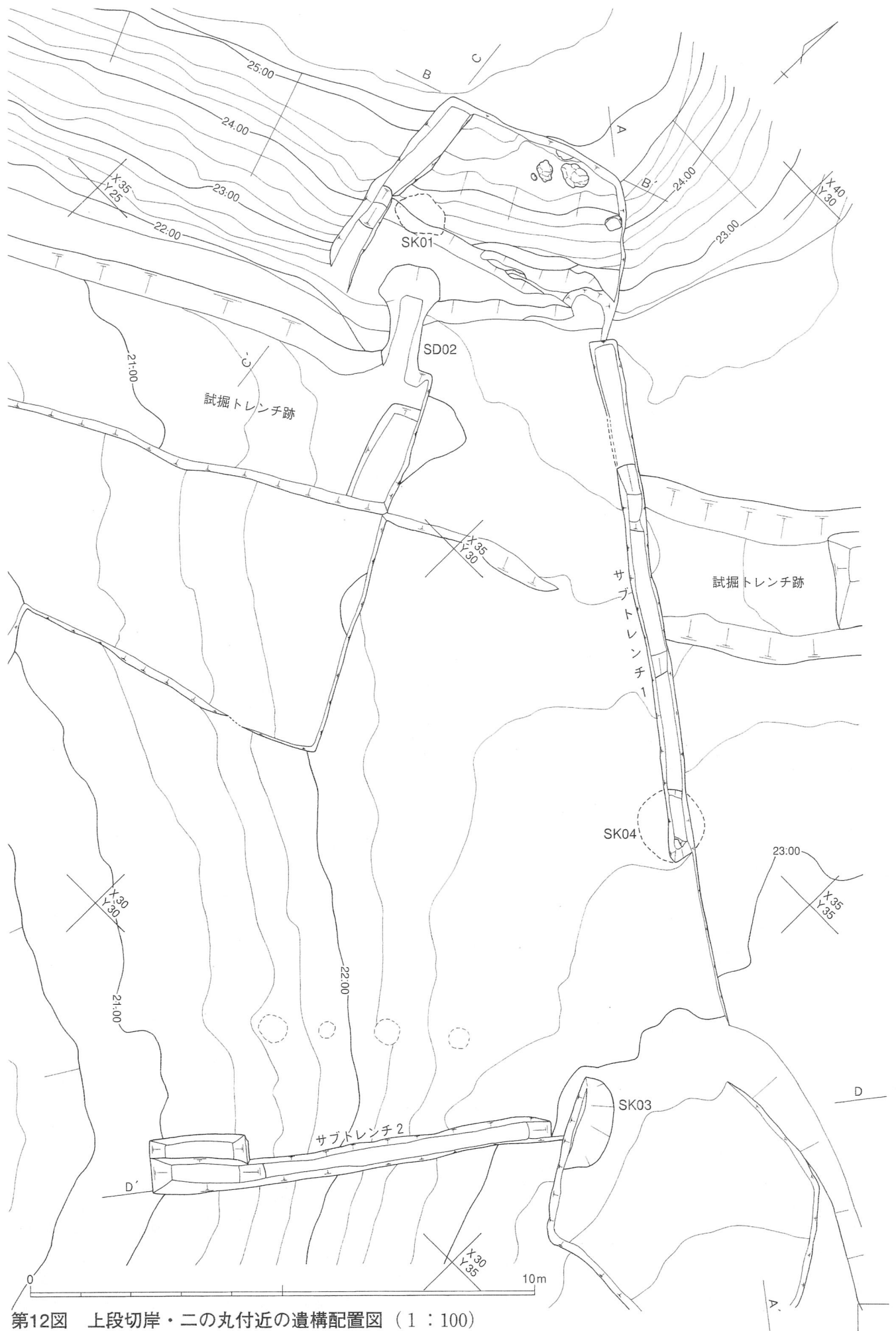
上段平坦面盛土下層(第11・12図第1・2表)

試掘で検出した弥生時代の溝は、上面幅3.95m、底面幅1.15m、深さ2.35mで、長さは2トレンチと4トレンチ及びサブトレンチ2までの約40mまで確認している。溝は南西方向には平坦面が続くことから延びていることが想定されるが、北東方向の5トレンチでは検出されていないため、直線的には延びず北西方向へ屈曲することも考えられる。

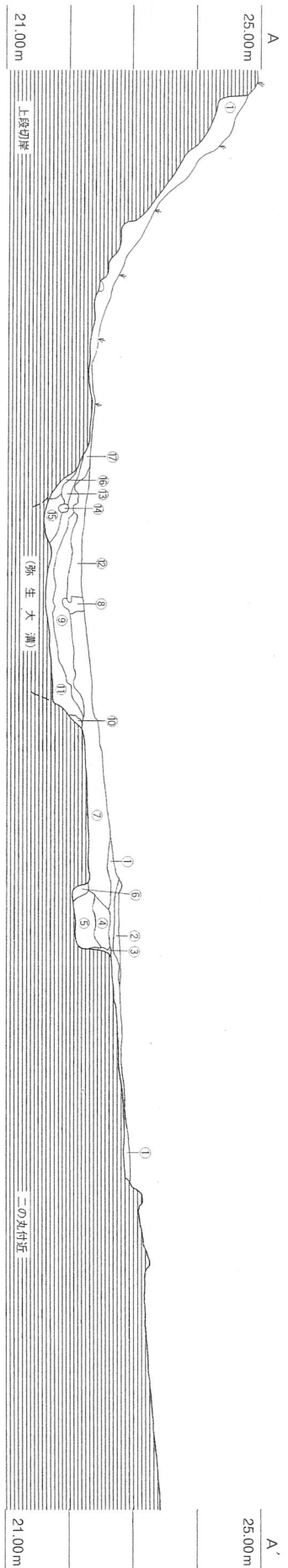
中段切岸及び中段平坦面下層(第12～14図)

土坑と柱穴状の遺構を17基検出した。SX70を除き弥生時代の遺構である。SK71・72は長方形の同規模の土坑でいずれも底面に木炭細片が出土した。また、SK72の西側で地山に埋め込まれ直立した状態で底部が欠損するがほぼ完形の甕(第31図320)が出土している。SK84は壁面の一部に被熱痕がみられ、底面付近の覆土からは焼土ブロックが出土している。SK77は底面から木炭細片が出土している。

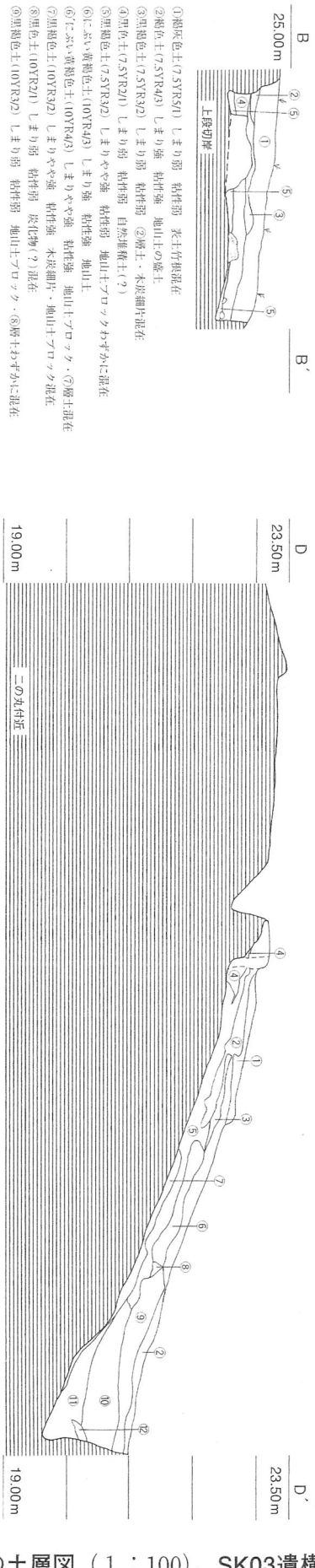
SX70は壁面を厚さ10cmほど漆喰で仕上げている近代以降の肥溜である。上段平坦面の遺構検出時に確認していたが、漆喰壁上面から「剣菱に蔦紋」の家紋の細工を施す簀(第29図235)が出土している。SK78～83は直線状にほぼ等間隔に並ぶ。X9～23Y10～16区で検出した土坑はSK87・88で出土遺物がなく、時期は不詳。



第12図 上段切岸・二の丸付近の遺構配置図 (1 : 100)



- ①褐灰色土(7SYR3/1) しまり弱 粘性弱 炭土竹根混在
- ②褐色土(7SYR4/3) しまり強 粘性強 地山土の盛土
- ③黒褐色土(7SYR3/2) しまり弱 粘性弱 ②腐土・木炭細片混在
- ④暗灰色土(7SYR2/1) しまり弱 粘性弱 自然堆積土(?)
- ⑤黒褐色土(7SYR3/2) しまりやや強 粘性弱 地山土プロックおすかに混在
- ⑥にさい黄褐色土(10YR4/3) しまり強 粘性強 地山土
- ⑦黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性強 木炭細片・地山土プロック混在
- ⑧黒色土(10YR2/1) しまり弱 粘性弱 炭化物(?)混在
- ⑨黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性強 木炭細片・地山土プロック多く混在
- ⑩暗褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強 地山の崩移層
- ⑪黒褐色土(7SYR3/1) しまりやや強 粘性なし 炭化物・地山土プロック細片おすかに混在
- ⑫黒褐色土(7SYR3/1) しまりやや強 粘性弱 混じりなし
- ⑬黒褐色土(7SYR3/2) しまりやや強 粘性強 混じりなし
- ⑭腐植土(10YR3/3) 地山土含む 腐植層大部分がボソソ 粘性なし
- ⑮黒褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性弱 混じりなし
- ⑯にさい赤褐色土(7SYR4/3) しまり弱 粘性強 地山土の崩落土か
- ⑰にさい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや強 粘性やや強 地山土



- ①褐灰色土(7SYR3/1) しまり弱 粘性弱 炭土竹根混在
- ②褐色土(7SYR4/3) しまり強 粘性強 地山土の盛土
- ③黒褐色土(7SYR3/2) しまり弱 粘性弱 ②腐土・木炭細片混在
- ④暗灰色土(7SYR2/1) しまり弱 粘性弱 自然堆積土(?)
- ⑤黒褐色土(7SYR3/2) しまりやや強 粘性弱 地山土プロックおすかに混在
- ⑥にさい黄褐色土(10YR4/3) しまり強 粘性強 地山土
- ⑦黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性強 木炭細片・地山土プロック混在
- ⑧黒色土(10YR2/1) しまり弱 粘性弱 炭化物(?)混在
- ⑨黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性強 木炭細片・地山土プロック多く混在
- ⑩暗褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強 地山の崩移層
- ⑪黒褐色土(7SYR3/1) しまりやや強 粘性なし 炭化物・地山土プロック細片おすかに混在
- ⑫黒褐色土(7SYR3/1) しまりやや強 粘性弱 混じりなし
- ⑬黒褐色土(7SYR3/2) しまりやや強 粘性強 混じりなし
- ⑭腐植土(10YR3/3) 地山土含む 腐植層大部分がボソソ 粘性なし
- ⑮黒褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性弱 混じりなし
- ⑯にさい赤褐色土(7SYR4/3) しまり弱 粘性強 地山土の崩落土か
- ⑰にさい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや強 粘性やや強 地山土



- ①黒褐色土(7SYR3/2) しまりやや強 粘性なし 腐植土(草木の根)混在
- ②黒褐色土(7SYR3/2) しまり弱 粘性なし おすかに地山土細小粒混在
- ③黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性やや有り 地山の崩移層おすかに混在
- ④黒色土(10YR2/1) しまり強 粘性弱 炭化物・地山土プロックおすかに混在 (SK03埋土)
- ⑤黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性弱 地山土プロックおすかに混在
- ⑥褐灰色土(7SYR4/1) しまり強 粘性やや強 地山土多く含む腐植土
- ⑦黒褐色土(7SYR3/2) しまりやや強 粘性やや強 地山の崩移層
- ⑧灰黄褐色土(10YR4/2) しまり弱 粘性やや強 混じりなし(地山崩移層)
- ⑨黒褐色土(7SYR3/2) しまり弱 粘性なし 表土(草木根混じり多々)
- ⑩黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱 混じりなし 中世下面面出土
- ⑪黒褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性強 混じりなし
- ⑫黒褐色土(10YR3/1) しまりやや強 粘性弱 地山土プロックおすかに混在 放生土器出土
- ⑬腐灰色土(10YR5/0) 腐葉土 しまりなし 粘性なし 草木の根を含む土
- ⑭褐色土(7SYR4/3) しまり強 粘性やや強 地山土
- ⑮暗褐色土(7SYR3/3) しまりやや強 粘性弱 地山土の堆積土
- ⑯黒色土(7SYR2/1) しまり強 粘性弱 炭化物・放生土器片・木炭細片混在

第13図 上段切岸・二の丸付近の土層図 (1 : 100)、SK03遺構図

5 出土遺物

弥生時代の遺物(第23～26図88～108、第27図125～143・145、第28図179～194、第30図244～248・253・254・278～282、第31図308を除く、第32図327～333、第2表)

弥生時代の遺物は日宮城築城時の丘陵地形に新たな改変が加えられたことにより、広範囲から出土している。試掘で確認された弥生時代の大溝は、この改変の影響をほとんど受けない位置に存在したため、溝の形態や土器の状態も良好に遺存していた。大溝出土の土器には甕・壺・高杯・器台・鉢が見られ、多くはないが赤彩を施す土器も出土している。以下特徴的な土器の一部を記す。

溝の底面から1～21、最下層から22～30、下層から31～46、中層から下層上面にかけては49～67、4トレンチ検出の大溝からは68～108が出土している。3と66の甕は外面に刺突文、内面をヘラケズリする。7の甕は口縁部が内傾、体部上半に列点文、内面にハケ目を施す。4と5は受口状口縁をもつ近江系の甕。13の長頸壺は外面に、14の鉢は内外面に赤彩を施す。24・28は「く」の字口縁の甕で、24の口唇部は厚く端部が角ばる。68は口唇部が厚く有段口縁の幅が狭い。これら大溝の大半の土器は、弥生時代後期後半の法仏Ⅱ式に特徴をもつ。また、23・57の壺や24・57の甕のように月影Ⅰ式の様相を呈する土器も見られる。

中世以降の遺物(第26図109～124、第27図146～162、第28図163～172・174～178、第29図、第30図251・252・255～277・284、第31図334～336・340～355、第2表)

遺物の多くを占めるのは土師器の皿で、上段斜面及び平坦面からの出土が最も多く、灯明皿として用いられタールや煤が付着するものもある。陶磁器類の出土量は少ない。

14世紀後半から15世紀代の遺物では、土師器の皿(109・115)や珠洲の甕(218)、青磁の碗(236)が出土している。16世紀後半の遺物は土師器の皿(110～114・117～120)が大半を占める。このほかに瀬戸美濃の皿(222)、天目茶碗(240)、越前の鉢(277)が出土している。17世紀前半の遺物には越中瀬戸のすり鉢(122)・皿(223)や唐津の碗(176)があり、17～18世紀代の遺物では唐津の碗(124)や皿(242)、19世紀以降には肥前系の瓶(229)や産地不明の碗(123)や花瓶(177)がある。

6 まとめ

今回の日宮城跡調査は昭和33年に町指定史跡となってから初めての本発掘調査となった。地元では「城山」とよばれ文献に登場するが、規模等の実態は近年の縄張り図が作成されるまで明らかでなかった。

調査地は本丸のある丘陵の東側にあたり、平成13年度の試掘調査で丘陵地形の改変の様子が初めて明らかになり、城郭地形の原形は弥生時代後期にまで遡ることが判明した。

弥生時代の大溝は、まず丘陵の北西斜面(上段切岸)側を溝幅に相当する3～4mまで削り平坦面を築き、その後に断面形が逆台形を呈する溝を掘り抜いている。斜面側の掘削土量は不明だが、北東方向に長さ40mまで確認できた溝の掘削土量は約240^m³にも及び、大量の土砂がすべて谷側に排出されたとは明言できないが、相当量が下方へ堆積したと推測される。今回の調査範囲では大溝は直線的な部分を確認するに留まったが、縄張り図に見える地形を考慮すると本丸のある丘陵頂部を中心にした環濠が想定される。

本丸(主郭)は、大溝(環濠)が埋まって既に段状となっていた地形を巧みに利用して再成形したと見られ、主郭はこの部分を基にして構成していったとも考えられる。

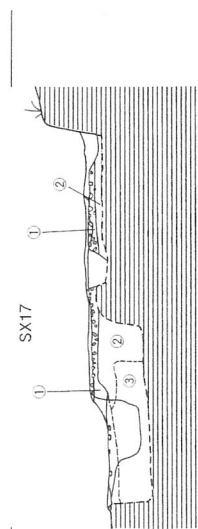
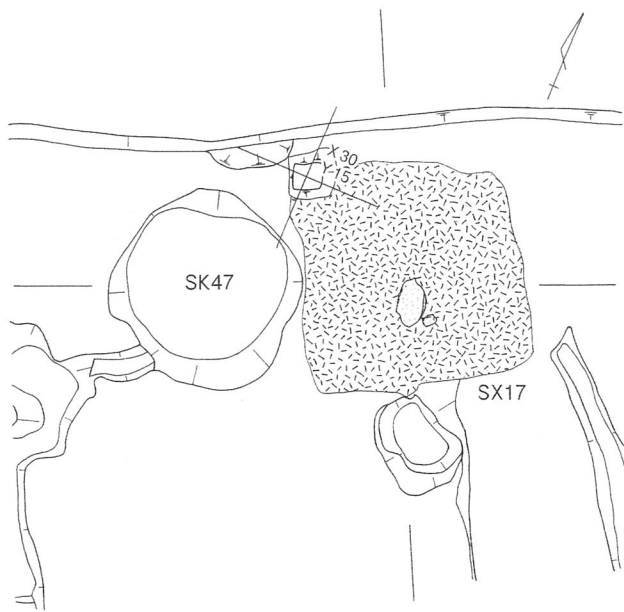
将来、史跡の整備計画が進み、更なる調査で日宮城跡の実態がより明らかになることを期待したい。



第14図 上段平坦面の遺構配置図と土層図 (1:100)

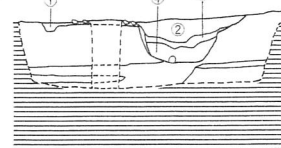
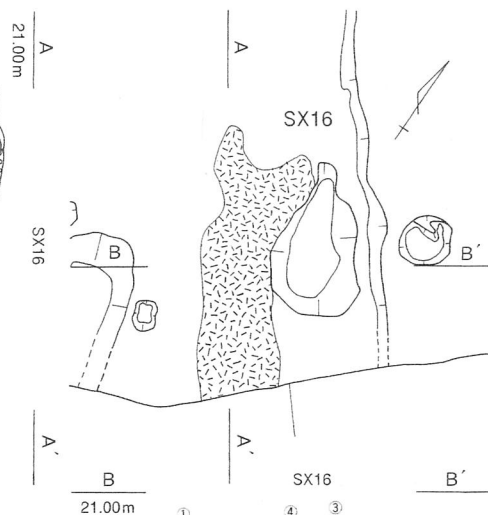
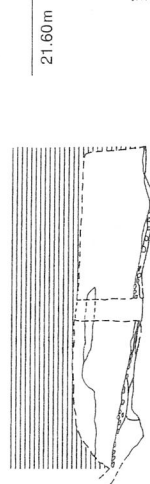
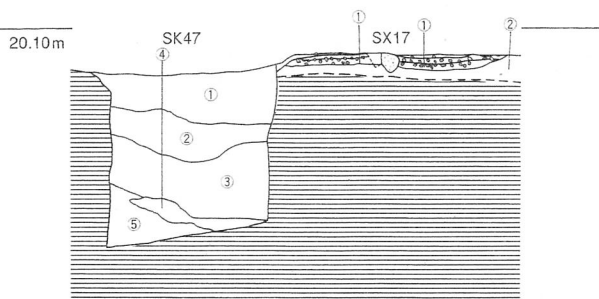
- A-A'
- ①黒褐色土(7.5YR3/1)しまり弱 粘性弱 表土腐葉土・腐根混在
 - ②黒褐色土(10YR3/2)しまりやや強 粘性弱 地山土小ブロック・炭化物ごくわずかに混在
 - ③黒褐色土(7.5YR3/2)しまり弱 粘性弱 地山土小ブロックわずかに混在
 - ④黒褐色土(10YR3/2)しまり弱 粘性弱 地山土小ブロックわずかに混在
 - ⑤灰黄褐色土(10YR4/2)しまりやや強 粘性やや強 地山土・地山土礫ブロック混在 中世盛土
 - ⑥暗褐色土(10YR3/3)しまりやや強 粘性弱 地山土礫混在
 - ⑦赤褐色土(2.5YR2/1)しまりやや強 粘性なし 木炭細片わずかに混在
 - ⑧黒褐色土(7.5YR3/2)しまり強 粘性弱 地山土ブロック多く混在
- B-B'
- ①表土
 - ②黄灰褐色土 地山ブロック混在 中世城郭築造時の盛土
 - ③黄灰褐色土 腐土ブロック混在 中世城郭築造時の盛土
 - ④黄白色土 砂質?地山土 5mm程度の小石混在り強い
 - ⑤赤褐色土 しまりやや強 粘性弱 炭化物・弥生土器片わずかに混在 弥生層の粗土
 - ⑥赤褐色土 しまり強 粘性やや強 粘質土 ③ブロック礫片わずかに混在 弥生層の粗土
 - ⑦黄灰白色土 しまり強 粘性弱 砂質土 ③地山ブロック・白色粘質土・ブロック混在 地山土の崩落により一帯に傾いた土砂 土器片混在り少ない
 - ⑧暗褐色土 しまり弱 粘性やや強 小石多く混在する粘質土 鉄分(赤)含む岩板が混在
 - ⑨暗赤褐色土 しまり弱 粘性強 礫ブロックわずかに混在 炭化物・木炭片(木炭片完形含む)多量に混在
 - ⑩暗赤褐色土 しまり強 粘性弱 砂質土 土器片わずかに出土
 - ⑪暗赤褐色土 崩落粘土ブロック

- B-B'
- ①暗褐色土 黒褐色土を含み黄褐色土となる
 - ②暗褐色土 しまり弱 粘性弱
 - ③暗褐色土 土器細片・木炭細片・炭化物混在
 - ④暗褐色土 地山の明黄褐色土ブロック多く混在
 - ⑤暗褐色土 しまり強 粘性弱 弥生土器混在
 - ⑥黒褐色土
- C-C'
- ①黄灰白色土 しまり弱 粘性弱 灰白色土ブロック塊状に混在
 - ②黒褐色土 しまりやや強 粘性弱 弥生土器片 黄白色地山ブロック(Φ10mm前後)わずかに混在
 - ③黒褐色土 しまりやや強 粘性弱 弥生土器片 黄白色地山ブロック(Φ10mm前後)わずかに混在
 - ④黒褐色土 しまりやや強 粘性弱 炭化物・土器細片混在
 - ⑤暗褐色土 しまり弱 粘性やや強
 - ⑥暗褐色土 しまり弱 粘性やや強 地山砂質ブロック・小石含む ③層に類似
 - ⑦黄灰褐色土 しまり強 粘性弱 地山砂質ブロック・灰白シルト質土ブロック混在 崩落ブロック
 - ⑧赤褐色土 しまり強 粘性弱 炭化物・土器細片混在 ②層に類似
 - ⑨暗褐色土 しまり強 粘性弱 木炭細片・地山砂質ブロックわずかに混在 弥生土器片多く混在
 - ⑩黄褐色土 しまり強 粘性弱 砂及び砂質ブロック・小石混在 崩落ブロック
 - ⑪暗褐色土 しまり弱 粘性強 地山土粘質土ブロック 崩落ブロック
 - ⑫暗褐色土 しまりやや強 粘性弱 木炭片・炭化物・赤土器片・小石多く混在
 - ⑬暗褐色土 しまり弱 粘性強 地山砂質ブロック(Φ40~50mm)

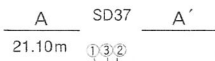
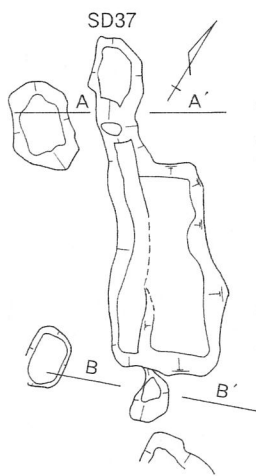


- SX17
- ①黒褐色土(7.5YR3/2) しまりやや強 粘性弱 木炭細片混在
 - ②灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや強 粘性弱 地山土ブロック多く混在(盛土)
 - ③黒褐色土(7.5YR3/2) しまりやや強 粘性弱 混じりなし 弥生大溝の覆土

- SK47
- ①黒褐色土(7.5YR3/2) しまり弱 粘性弱 炭化物・地山土ごくわずかに混在
 - ②灰褐色土(7.5YR4/2) しまりやや強 粘性弱 地山土ブロック・砂岩ブロック多く混在
 - ③黒褐色土(7.5YR3/2) しまりなし 粘性なし 地山土わずかに混在
 - ④黒色土(N2/0) しまり弱 粘性弱 木炭細片・炭化物多量に混在
 - ⑤灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや強 粘性やや強 地山土ブロック多量に混在 木炭細片わずかに混在



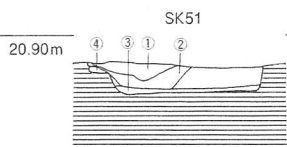
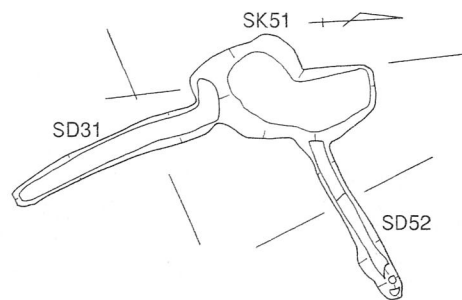
- ①暗紫灰色土(5RP3/1) しまり弱 粘性弱 木炭細片・炭化物混在
- ②黒色土(7.5YR2/1) しまり弱 粘性弱 木炭細片・炭化物・焼土ブロック多量に混在
- ③にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや強 粘性弱 地山土ブロック・炭化物混在
- ④暗褐色土(10YR3/3) しまり弱 粘性弱 木炭細片・地山土小ブロック・土層の小石混在



- ①黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱 炭化物・地山土小ブロックわずかに混在
- ②オリーブ黒色土(7.5Y3/2) 地山土ブロック
- ③黒褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性強 地山土極小ブロックわずかに混在



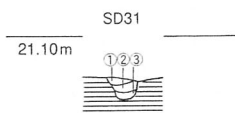
- ①黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱 炭化物わずかに混在
- ②黒褐色土(7.5YR3/2) しまりなし 粘性弱 地山土小ブロック・炭化物混在



- ①黒褐色土(10YR3/2) しまりなし 粘性なし 炭化物・木炭細片・地山礫ブロック混在
- ②灰黄褐色土(10YR4/2) しまり弱 粘性なし 地山砂岩礫ブロックやや多く混在
- ③オリーブ黒色土(5Y3/1) しまりやや強 粘性なし 中世盛土以前の表表土(掘りすぎ)
- ④黄灰色土(2.5Y4/1) しまりやや強 粘性弱 地山砂岩ブロック多く混在 中世盛土

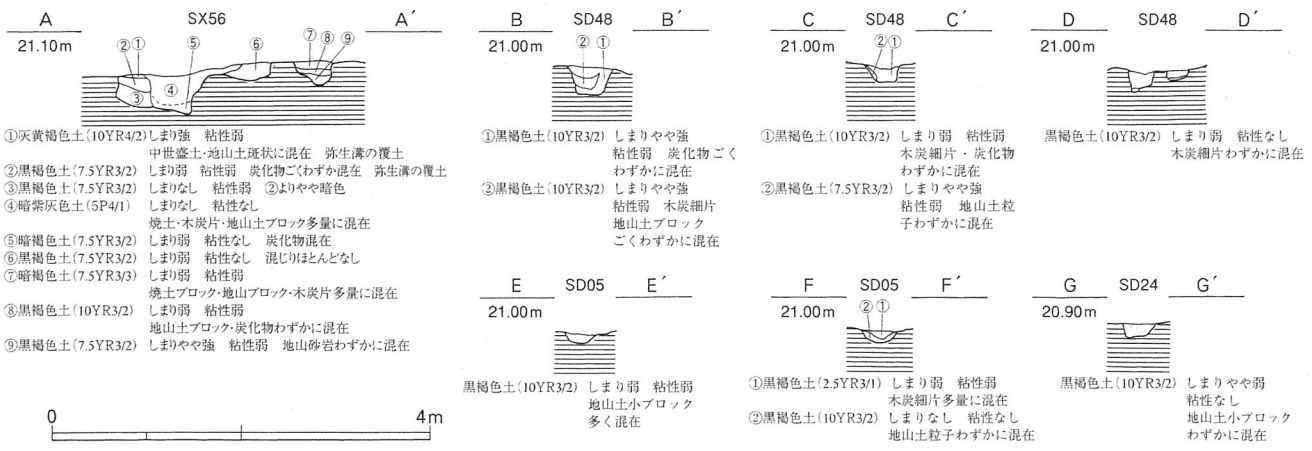


- ①黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱 炭化物・地山土ブロック・木炭細片わずかに混在
- ②オリーブ黒色土(5Y3/1) しまりなし 粘性なし 木炭細片混在
- ③黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性弱 地山土粒子混在

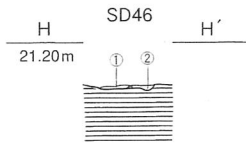


- ①黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱 木炭細片多量に混在
- ②暗褐色土(7.5YR3/3) しまり弱 粘性弱 地山土粒子多量に混在
- ③黒褐色土(7.5YR3/2) しまり弱 粘性弱 地山砂岩小ブロック混在

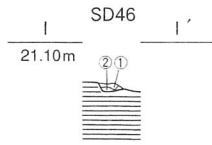
第15図 上段平坦面の遺構図 (SD31・37・52, SK47・51, SX16・17)



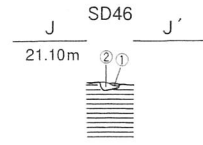
第16図 上段平坦面の遺構図 (SD05・24・46・48・59, SK20・38・50・57・58・68, SX56)



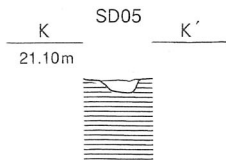
①黒褐色土(2.5Y3/2) しまり弱 粘性弱
木炭細片混在
②灰褐色土(7.5YR4/2) しまり弱 粘性弱
炭化物わずかに混在



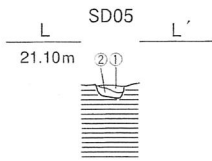
①黒褐色土(10YR3/1) しまり弱 粘性弱
炭化物わずかに混在 木炭
細片多量に混在
②灰褐色土(7.5YR4/2) しまり弱 粘性弱
中世盛土に炭化物混在



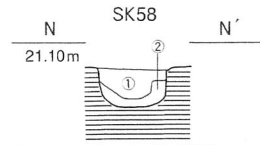
①黒褐色土(10YR3/1) しまり弱 粘性弱
炭化物・木炭細片多量
に混在
②灰褐色土(7.5YR4/2) しまり弱 粘性弱
中世盛土に炭化物混在



オリーブ黒色土(7.5Y3/2) しまりやや強 粘性弱
木炭細片・地山土やや
多く混在



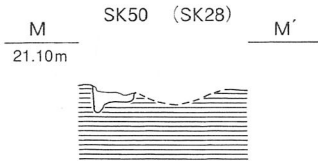
①黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性弱
木炭細片やや多く混在
②黒褐色土(7.5YR3/2) しまりなし
地山土粒子・炭化物混在



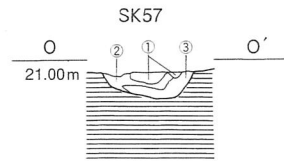
①灰黄褐色土(10YR4/2) しまり弱 粘性弱
地山土礫ブロック斑状に多く混在
②黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱
地山土粒子混在



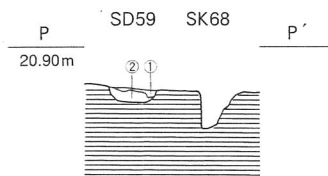
黒褐色土(7.5YR3/2) しまり弱 粘性弱
地山土小ブロック・木炭細片
わずかに混在



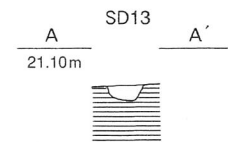
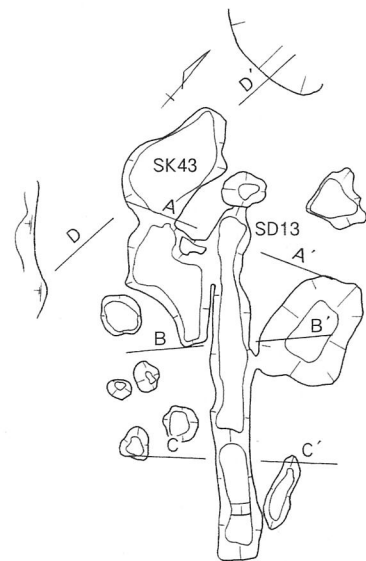
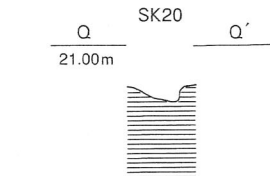
黒褐色土(7.5YR3/1) しまりやや強 粘性弱
木炭細片やや多く混在
地山土小ブロック斑状
に混在



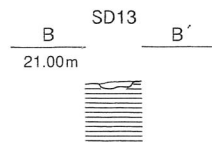
①灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強 粘性弱
地山土礫ブロック
多量に混在
②灰黄褐色土(10YR4/2) しまり弱 粘性弱
地山土粒子・炭化
物混在
③黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱
地山礫ブロック斑状
に混在



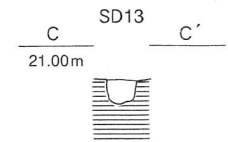
①にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり弱 粘性弱
地山土粒子多量に混在
②暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性弱
地山砂岩ブロックわずかに混在



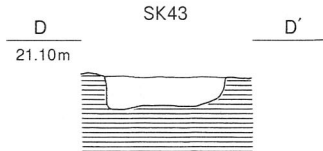
黒褐色土(10YR3/2) しまり弱 粘性弱
木炭細片・地山土
ブロックわずかに混在



灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや強 粘性弱
炭化物・地山土小ブロック
やや多く混在



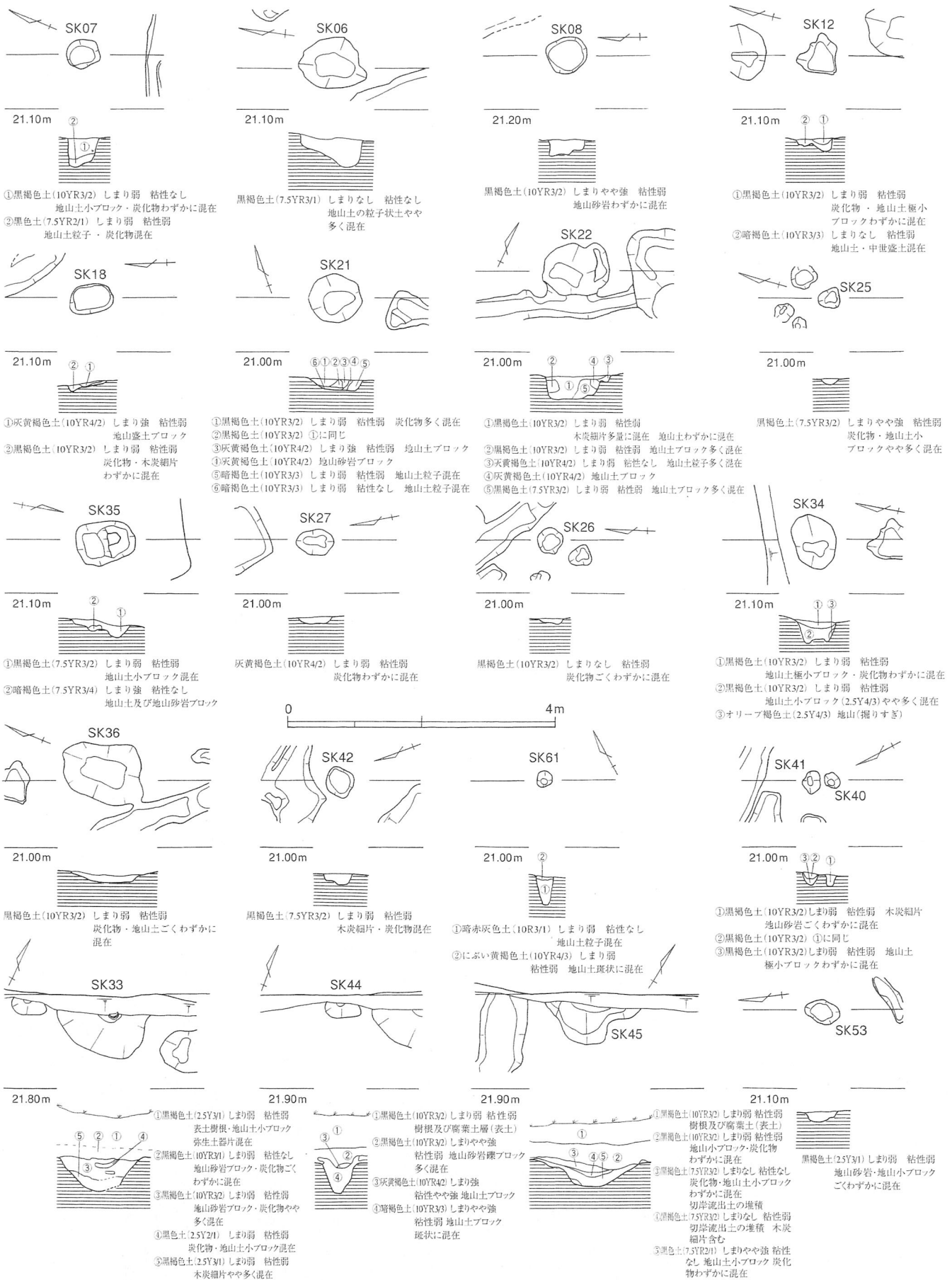
黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強
粘性弱 地山砂岩
ブロック多く混在
炭化物わずかに混在



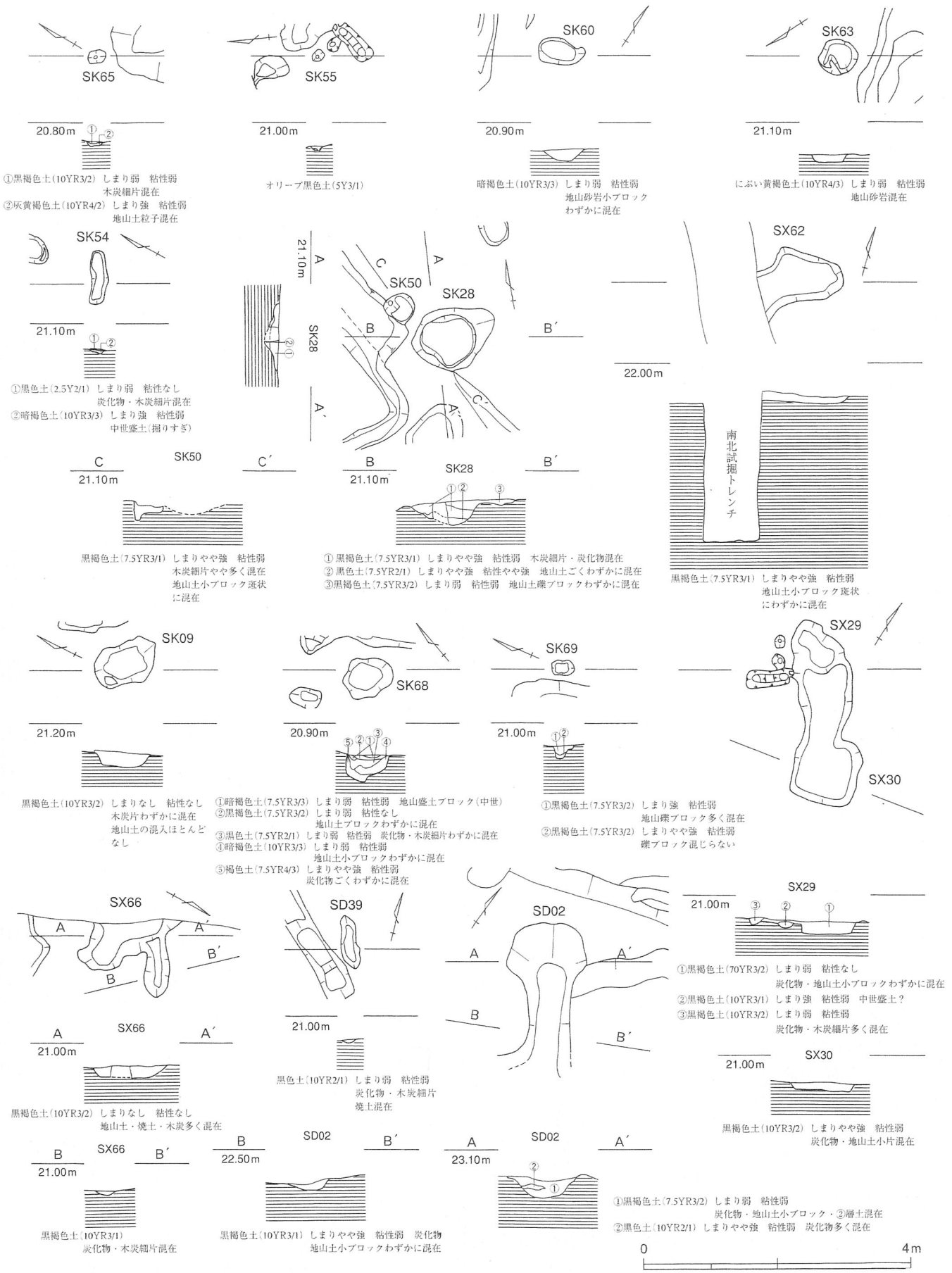
黒褐色土(7.5YR3/1) しまりやや強 粘性弱
炭化物・地山土ごくわずかに混在



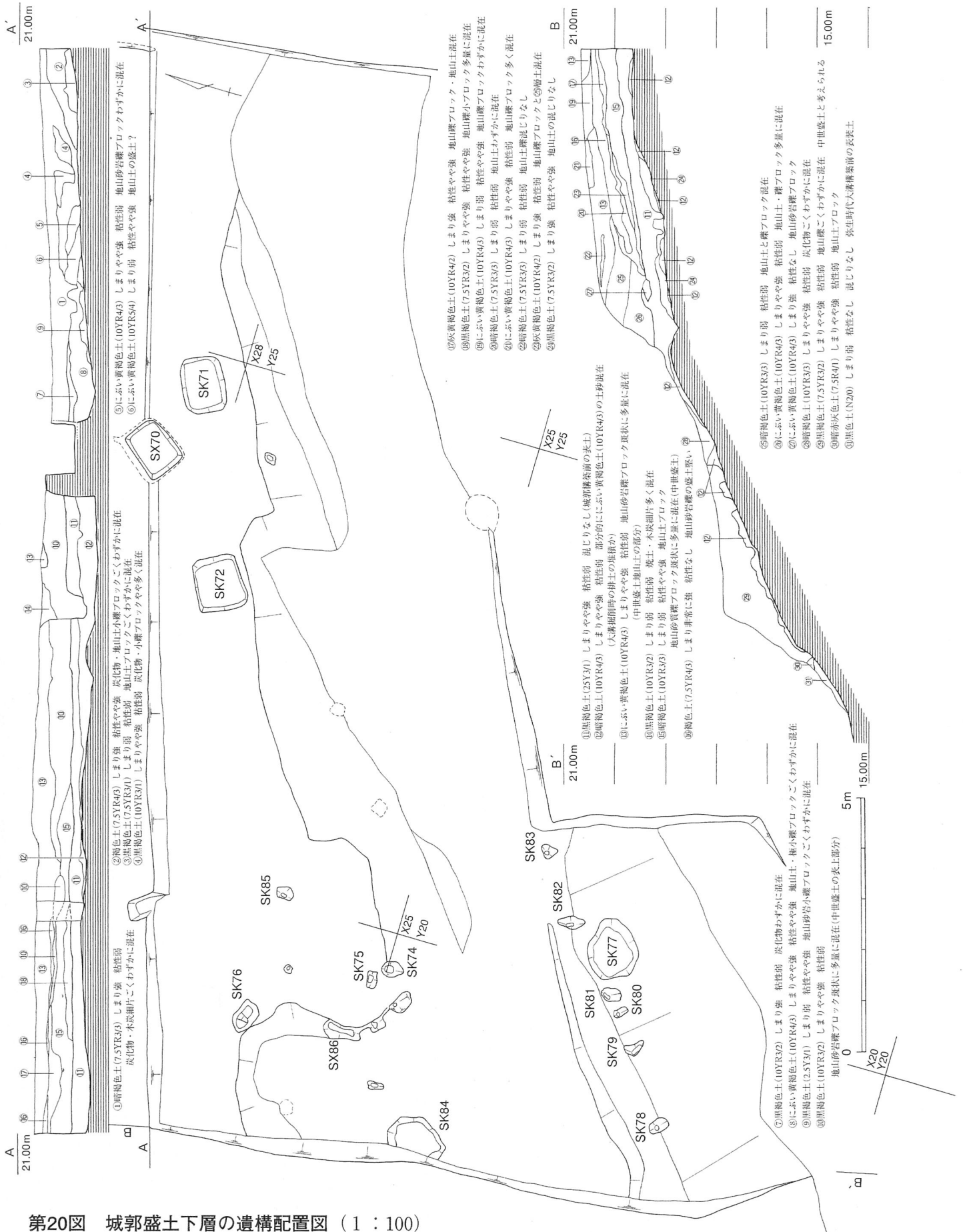
第17図 上段平坦面の遺構・土層図 (SD05・13・46・59, SK20・38・43・50・57・58・68)



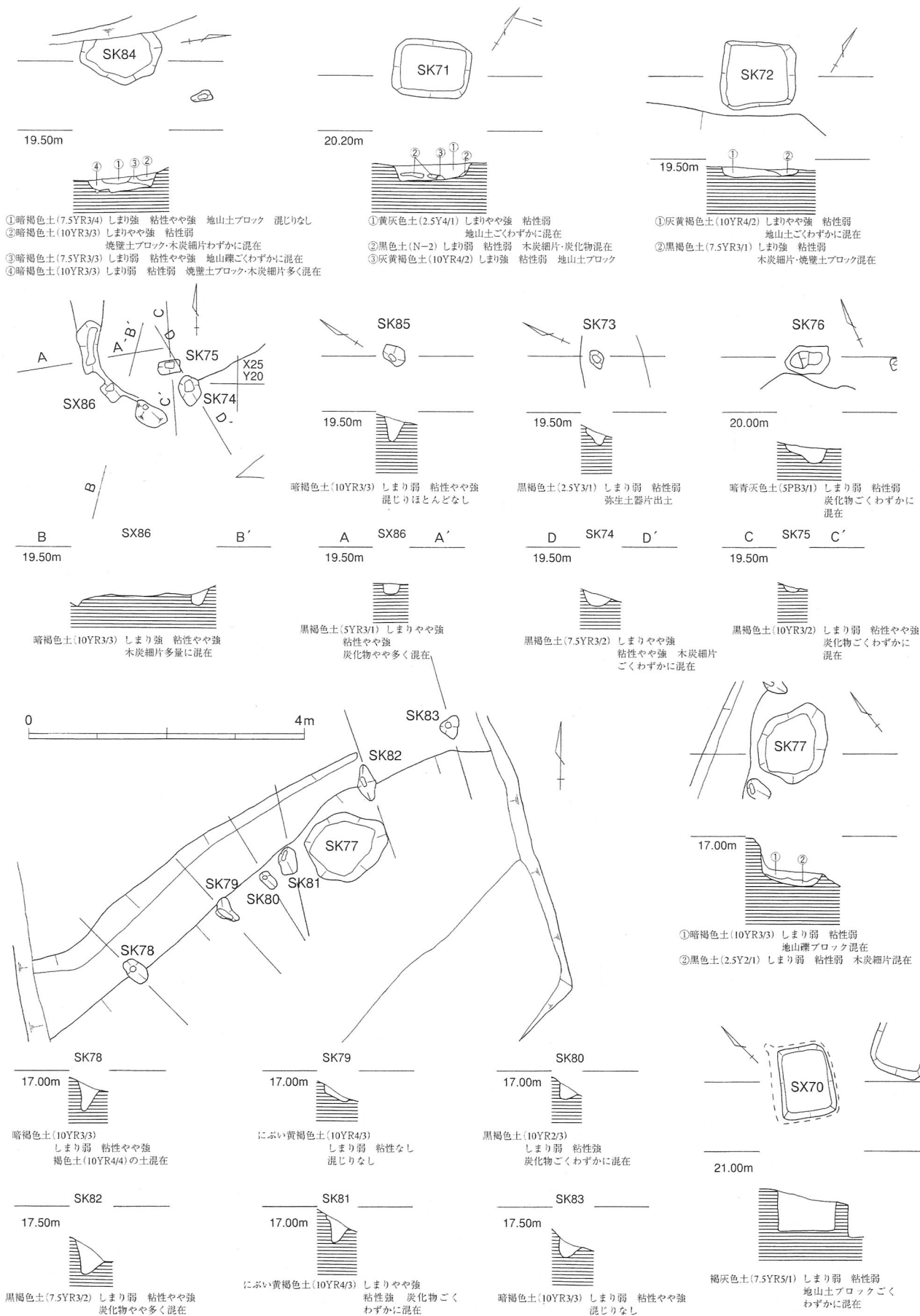
第18図 上段平坦面の遺構図 (SK06~08・12・18・21・22・25~27・33~36・40~42・44・45・53・61)



第19図 上段平坦面の遺構図 (SD02・39, SK09・28・50・54・55・60・63・65・68・69, SX29・30・62・66)



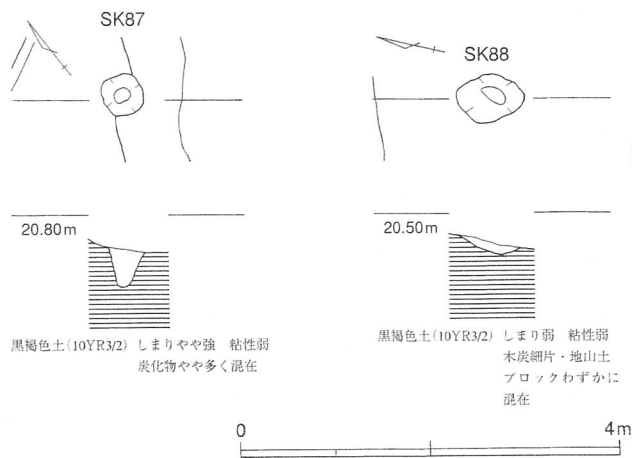
第20図 城郭盛土下層の遺構配置図 (1:100)



第21図 城郭盛土下層の遺構図 (SK71~85, SX70・86)



- ①黒褐色土(7.5YR3/1) しまり弱 粘性弱 表土腐葉土・樹根混在
- ②黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性弱 地山土小ブロック・炭化物ごくわずかに混在
- ③黒色土(N2/0) しまり弱 粘性弱 混じりなし
- ④褐色土(7.5YR4/3) しまり強 粘性やや強 地山土ブロック
- ⑤黒色土(10YR2/1) しまり弱 粘性弱 木炭細片・炭化物わずかに混在
- ⑥黒褐色土(7.5YR3/1) しまりやや強 粘性弱 地山土砂粒子で砂岩小ブロックごくわずかに混在
- ⑦黒褐色土(10YR3/2) しまりやや強 粘性弱 地山土ブロック多く混在
- ⑧黒褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性弱 混じりほとんどなし

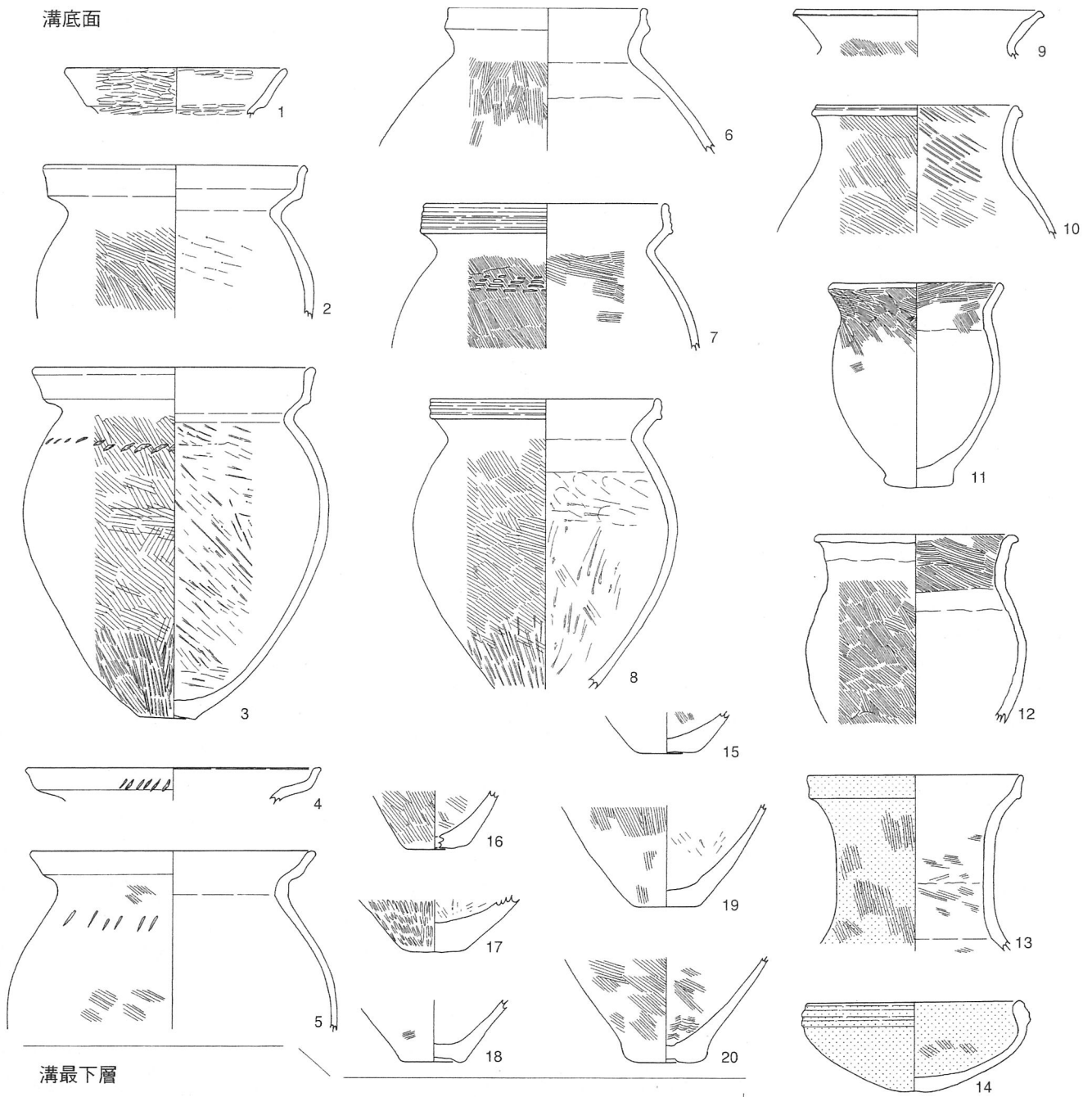


第22図 下層の遺構配置図と遺構図 (SK87・88)

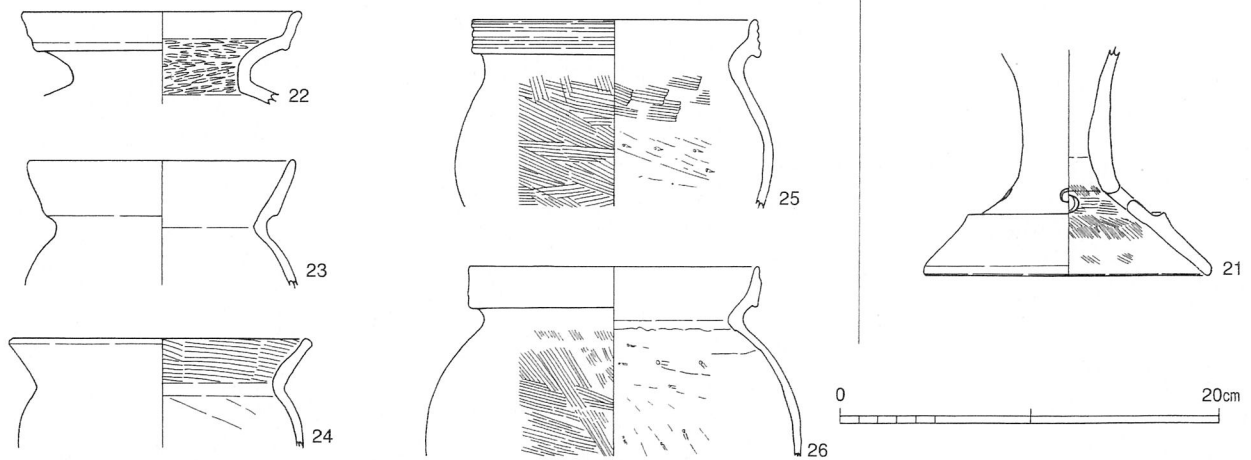
遺構 番号	図版 番号	発掘区	規模(単位:m)			出土遺物
			長さ	幅	深さ	
SK01	第12図	X36-37Y27	(1.10)	(0.80)	0.41	
SD02	第19図	X36Y27-28	2.35	0.71	0.30	中世土師器
SK03	第13図	X31-32Y34-35	1.86	0.80	0.81	弥生土器
SK04	第12図	X34Y33	1.60	1.32	0.76	弥生土器
SD05	第16図	X25~29Y15~17	5.05	0.38	0.12	中世土師器
SK06	第18図	X30Y18	1.02	0.78	0.44	弥生土器
SK07		X28-29Y18	0.49	0.41	0.43	
SK08		X29-30Y17	0.61	0.55	0.24	
SK09	第19図	X30-31Y18-19	1.00	0.60	0.21	
-	-	-	-	-	-	
SK11	第14図	X31Y20	-	-	-	
SK12	第18図	X31-32Y21	0.60	0.58	0.19	
SD13	第17図	X30-31Y20~22	3.20	0.40	0.26	中世土師器
-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	
SX16	第15図	X26-27Y19-20	2.90	1.60	0.42	刀子
SX17		X28~30Y14~16	3.50	2.20	0.15	弥生土器
SK18	第18図	X29-30Y19	0.66	0.42	0.08	
-	-	-	-	-	-	
SK20	第16図	X25Y18	0.29	0.48	0.18	
SK21	第18図	X26Y17-18	0.79	0.72	0.15	
SK22		X26-27Y17	1.01	0.76	0.44	
-	-	-	-	-	-	
SD24	第16図	X24~26Y15-16	5.10	0.34	0.14	
SK25	第18図	X30Y21	0.33	0.26	0.08	
SK26		X30Y21	0.39	0.38	0.08	
SK27		X28Y20-21	0.56	0.38	0.10	
SK28	第19図	X28-29Y18-19	1.26	0.91	0.37	
SX29		X29Y20	1.80	1.53	0.18	弥生土器
SX30		X28-29Y20-21	1.01	0.98	0.13	
SD31	第15図	X29-30Y22-23	2.48	0.34	0.22	中世土師器
-	-	-	-	-	-	
SK33	第18図	X32Y20	1.40	0.60	0.49	中世土師器
SK34		X32Y20-21	0.86	0.64	0.34	
SK35		X32Y22	0.88	0.65	0.18	
SK36		X31Y21	1.14	0.85	0.10	
SD37	第15図	X29~31Y19-20	4.10	1.30	0.17	弥生土器
SK38	第16図	X30Y18	0.57	0.52	0.03	
SD39	第19図	X30Y21-22	0.80	0.28	0.05	
SK40	第18図	X30Y20-21	0.24	0.21	0.17	
SK41		X30Y21	0.32	0.26	0.17	
SK42		X30Y20	0.41	0.40	0.16	
SK43	第17図	X31Y20	1.36	0.72	0.35	弥生土器
SK44	第18図	X32Y19	0.52	0.22	0.53	
SK45	第18図	X31Y17-18	1.48	0.60	0.35	
SD46	第16図	-	9.00	0.65	0.08	
SK47	第15図	X28-29Y14-15	2.09	2.05	1.87	中世土師器
SD48	第16図	X23~29Y13~16	13.80	0.40	0.29	弥生土器
SD49	第14図	X28Y14	1.03	0.30	0.21	弥生土器
SK50	第16図	X29Y18-19	0.44	0.42	0.23	
SK51	第15図	X30-31Y22-23	1.93	1.08	0.32	
SD52		X30-31Y23-24	1.90	0.21	0.09	
SK53	第18図	X30-31Y24	0.52	0.33	0.15	
SK54	第19図	X30Y24	0.79	0.23	0.07	
SK55		X29Y20	0.20	1.50	0.07	
SX56	第16図	X27Y13-14	1.50	0.90	0.41	須恵器
SK57		X27Y17-18	1.48	1.03	0.28	
SK58		X28Y18-19	0.96	0.66	0.40	
SD59		X25-26Y18-19	2.00	0.42	0.15	
SK60	第19図	X24Y16-17	0.72	0.39	0.18	
SK61	第18図	X25Y17	0.23	0.25	0.42	
SX62	第19図	X24Y15	1.31	0.60	0.13	
SK63		X27Y20	0.61	0.54	0.11	
SD64	第14図	X26-27Y15-16	1.90	0.38	0.19	
SP65	第19図	X26Y19	0.26	0.19	0.08	
SX66		X24-25Y14-15	1.30	1.00	0.18	
-	-	-	-	-	-	
SK68	第19図	X25Y18	0.75	0.60	0.52	
SK69		X26Y19	0.32	0.22	0.20	
SX70	第21図	X29Y23-24	1.02	0.76	0.58	
SK71		X29Y24	1.10	0.84	0.20	
SK72		X28Y22-23	1.09	0.93	0.14	
SK73		X28Y24	0.24	0.19	0.16	
SK74		X25-26Y19	0.40	0.30	0.19	
SK75		X26Y19	0.33	0.18	0.07	
SK76		X27Y18	0.64	0.39	0.22	
SK77		X23-24Y20	1.22	1.01	0.19	
SK78		X22-23Y18	0.40	0.25	0.36	
SK79		X23Y19	0.36	0.21	0.09	
SK80		X23Y19	0.29	0.15	0.19	
SK81		X23Y19-20	0.39	0.25	0.30	
SK82		X24Y20	0.54	0.26	0.34	
SK83		X24Y21	0.30	0.28	0.21	
SK84	X24-25Y17-18	1.12	0.70	0.20		
SK85	X27Y20	0.34	0.24	0.31		
SX86	X26Y18	1.81	0.22	0.18		
SK87	第22図	X23Y11-12	0.43	0.43	0.38	
SK88		X23Y13	0.71	0.49	0.09	

第1表 遺構一覽

溝底面

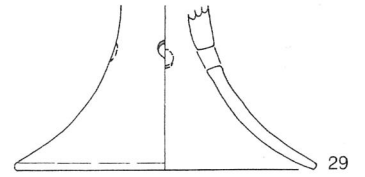
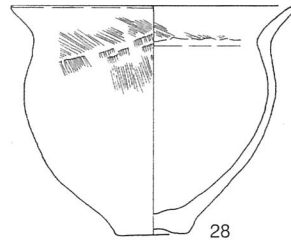
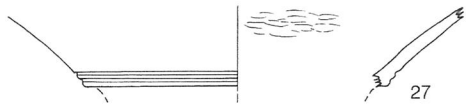


溝最下層

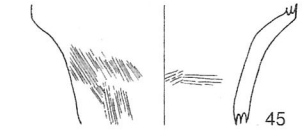
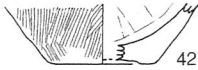
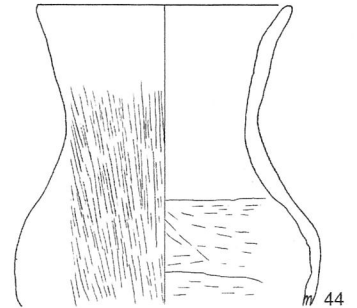
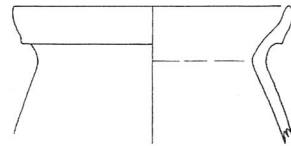
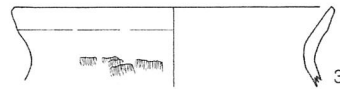
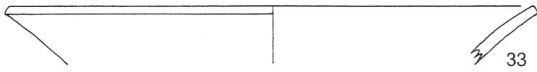
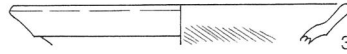
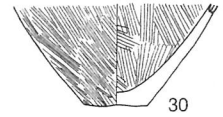
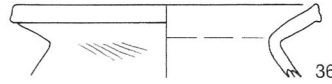


第23図 試掘調査の出土遺物 (南北トレンチ大溝内)

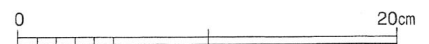
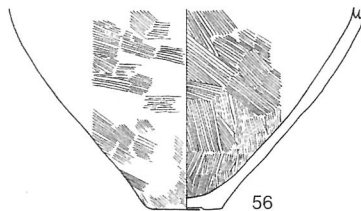
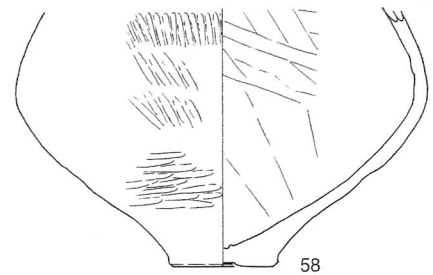
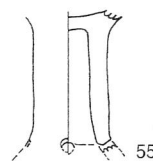
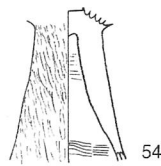
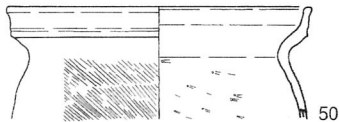
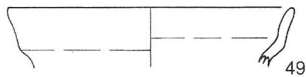
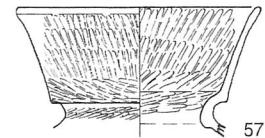
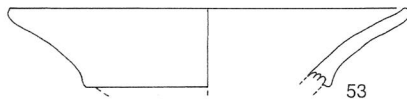
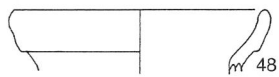
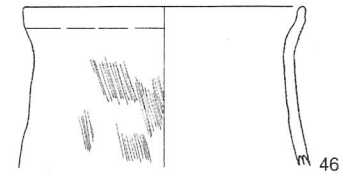
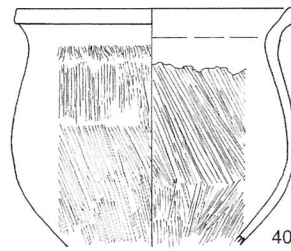
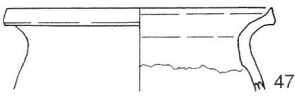
溝最下層



下層

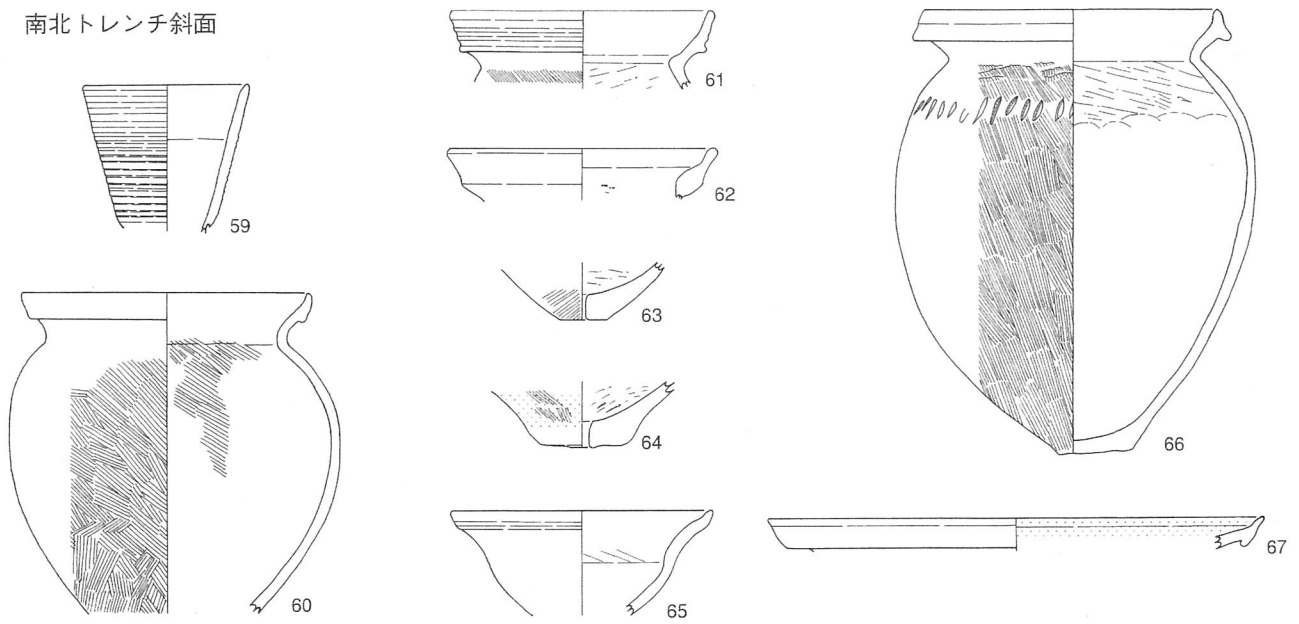


下層・中層

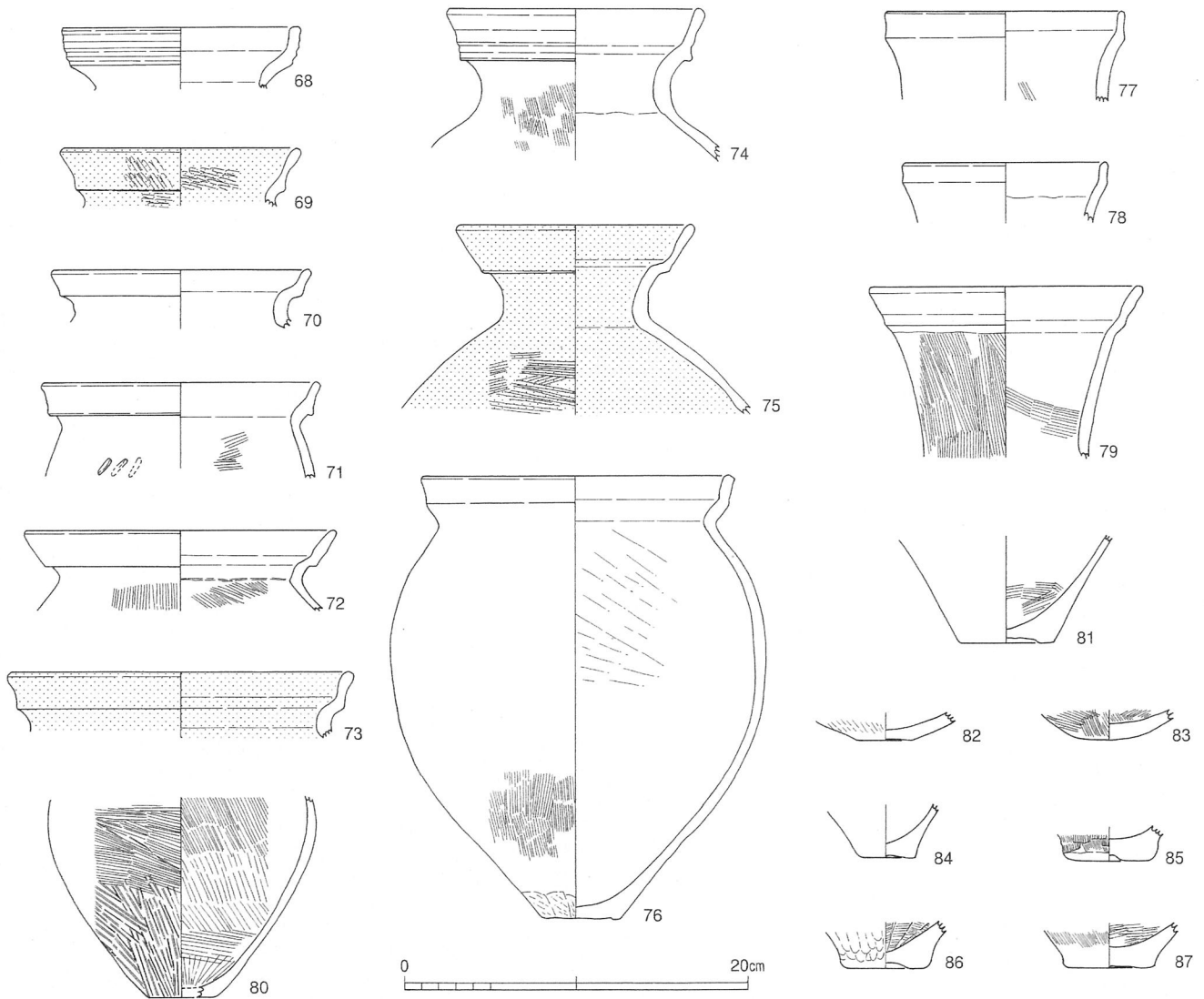


第24図 試掘調査の出土遺物 (南北トレンチ大溝内)

南北トレンチ斜面

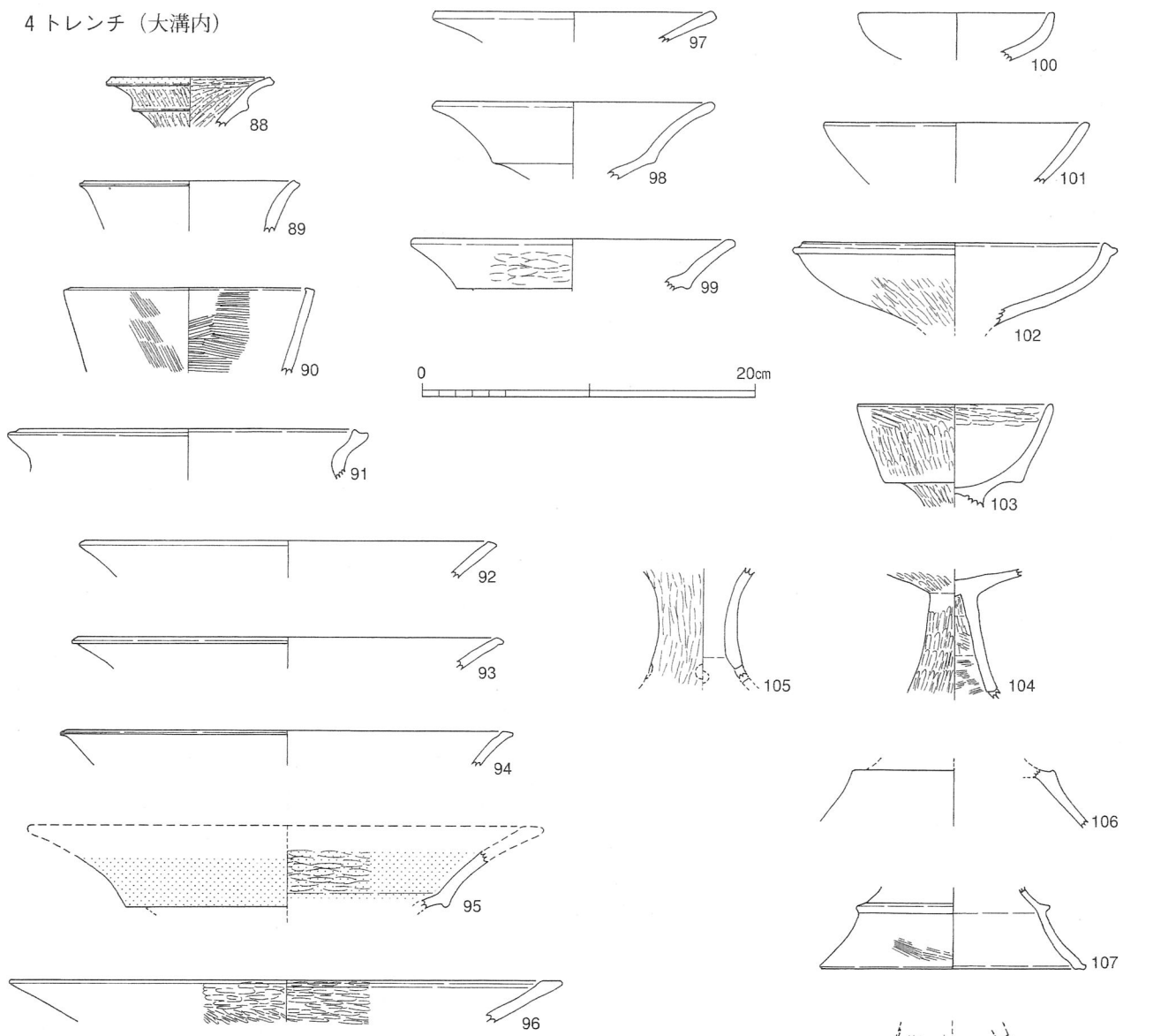


4 トレンチ (大溝内)

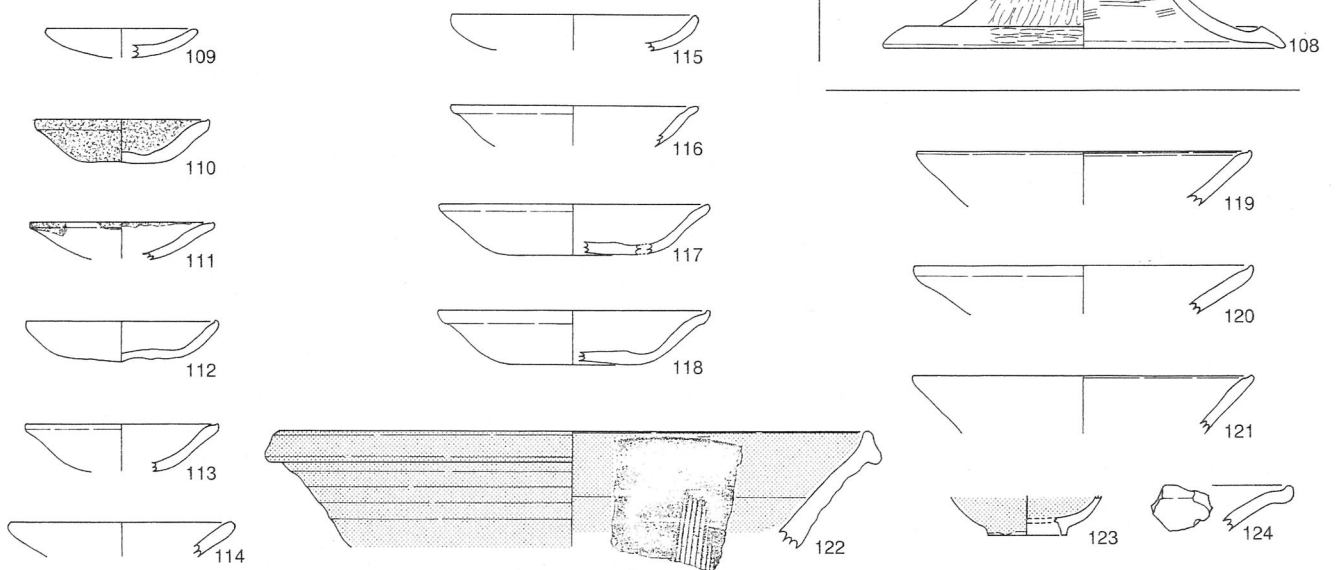


第25図 試掘調査の出土遺物 (南北トレンチ斜面・4トレンチ大溝内)

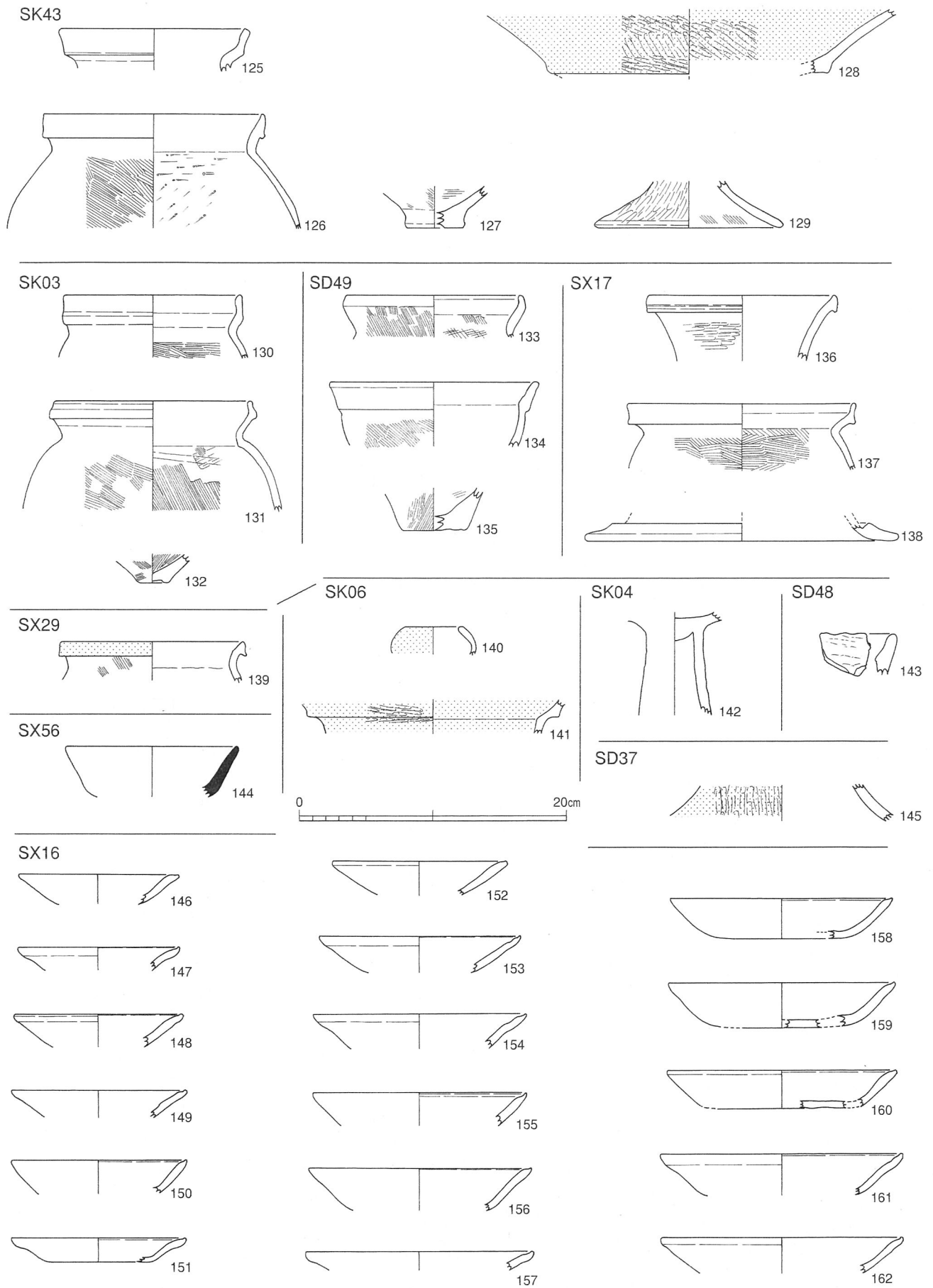
4 トレンチ (大溝内)



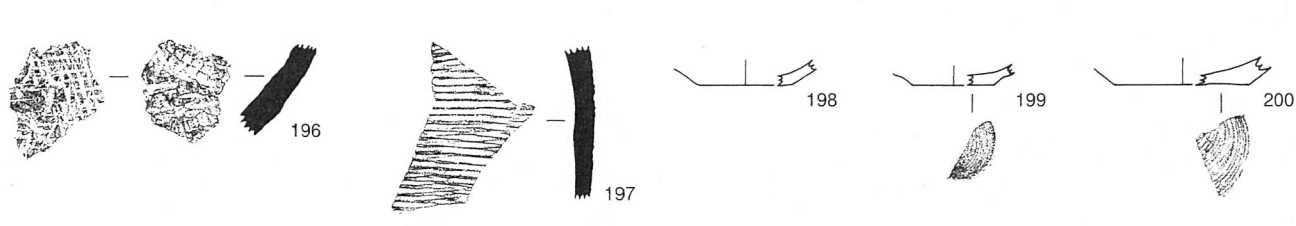
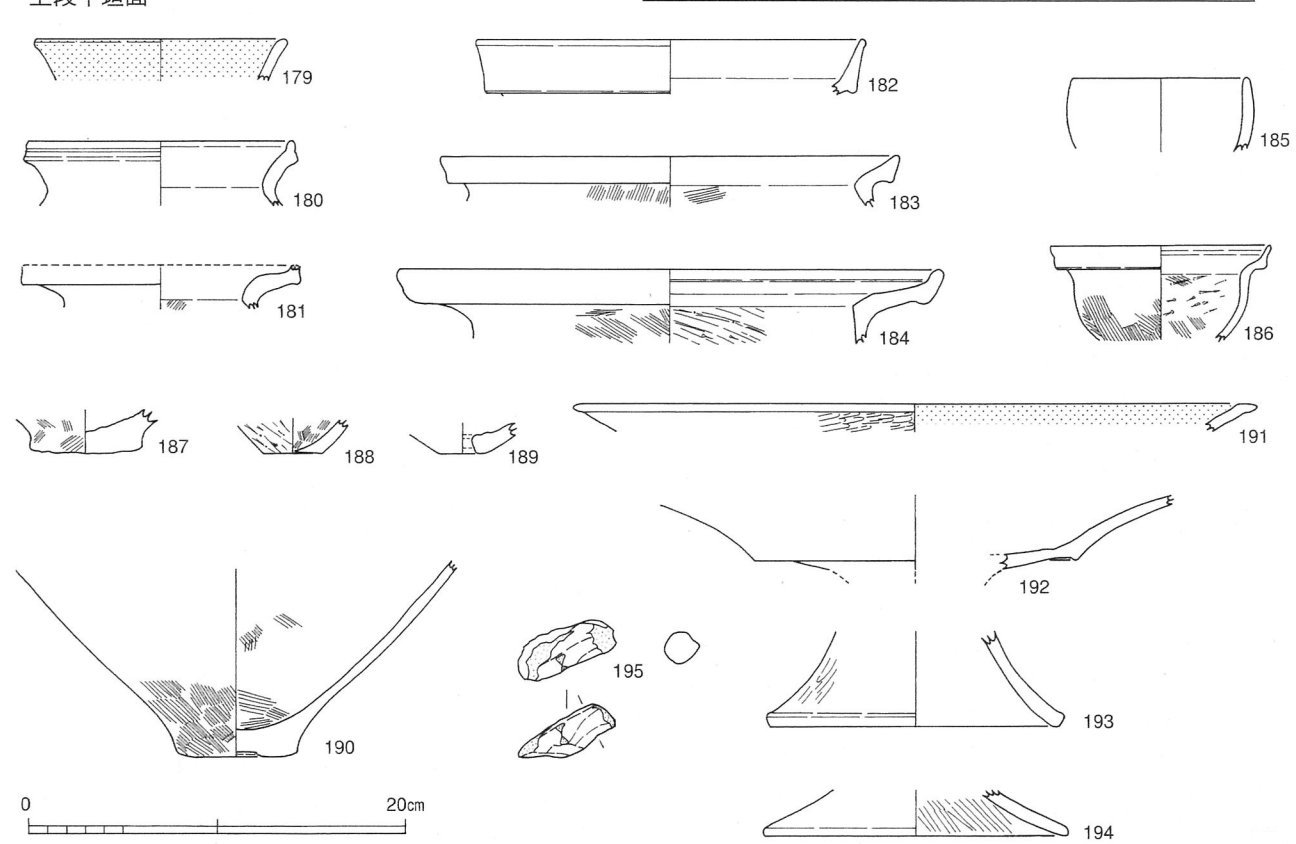
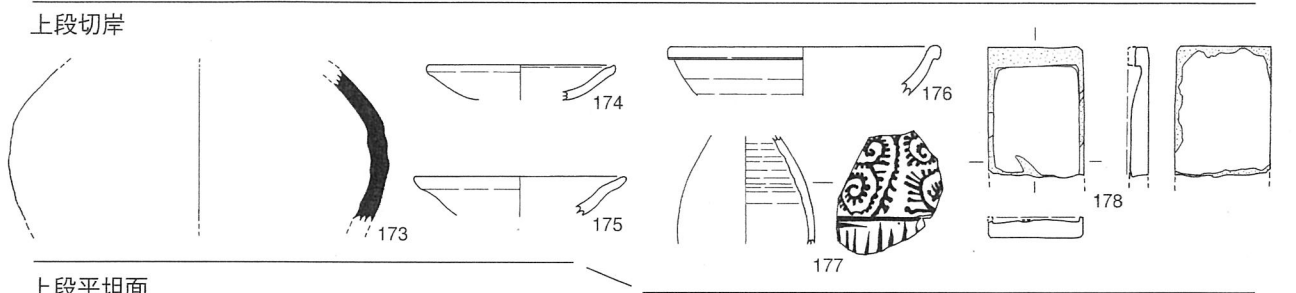
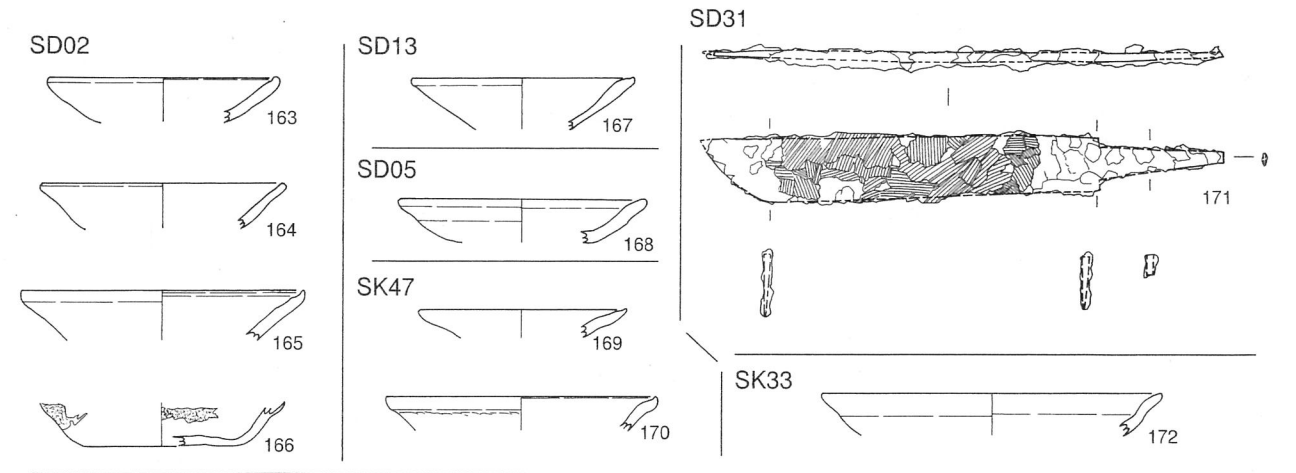
その他のトレンチ



第26図 試掘調査の出土遺物 (4 トレンチ大溝内・その他のトレンチ)

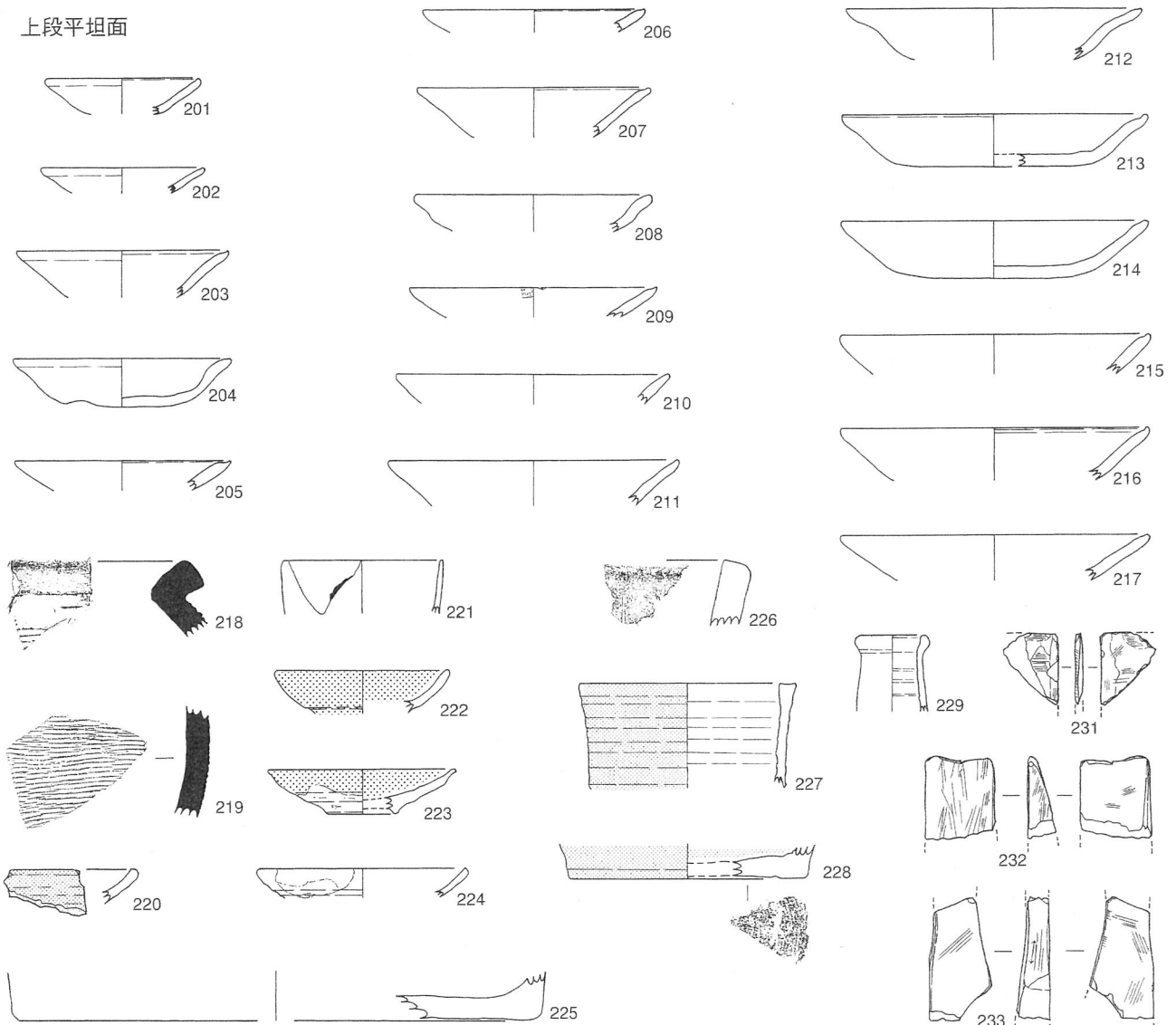


第27図 遺構の出土遺物

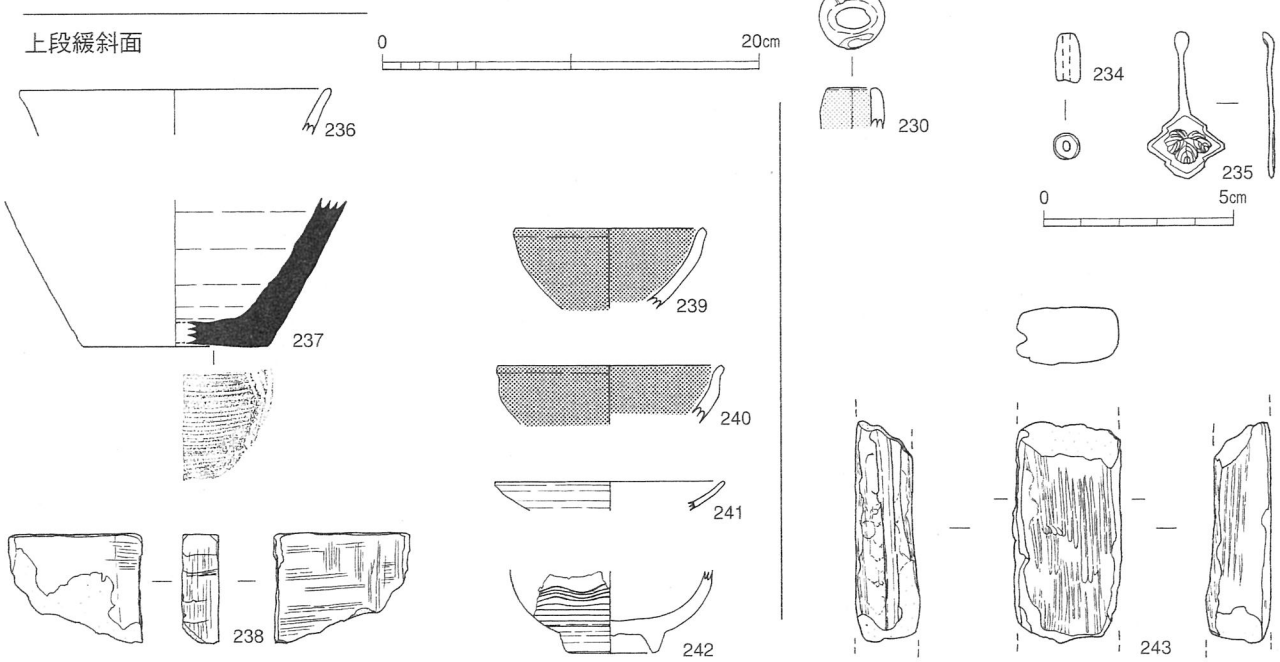


第28図 遺構と遺構外の出土遺物

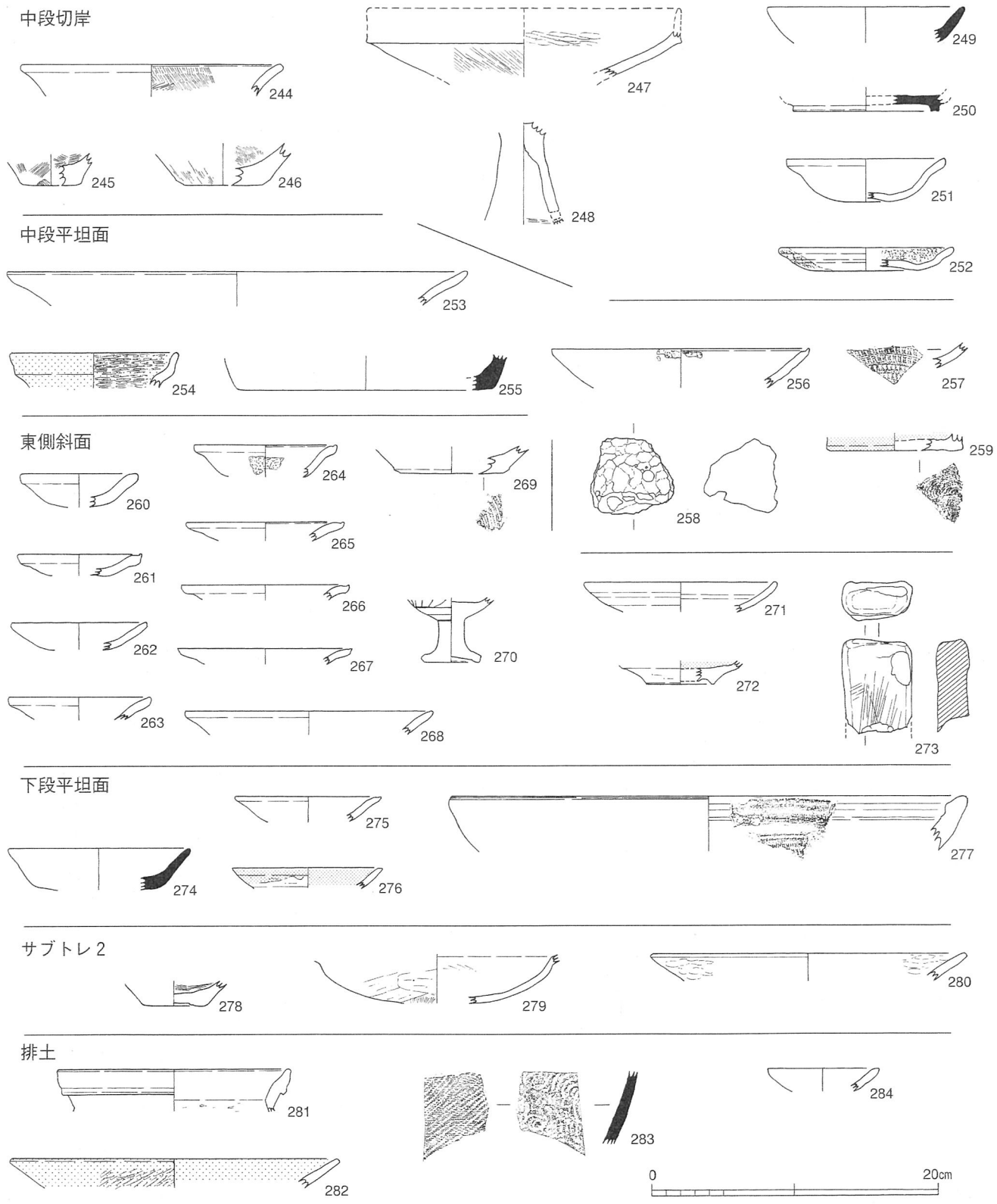
上段平坦面



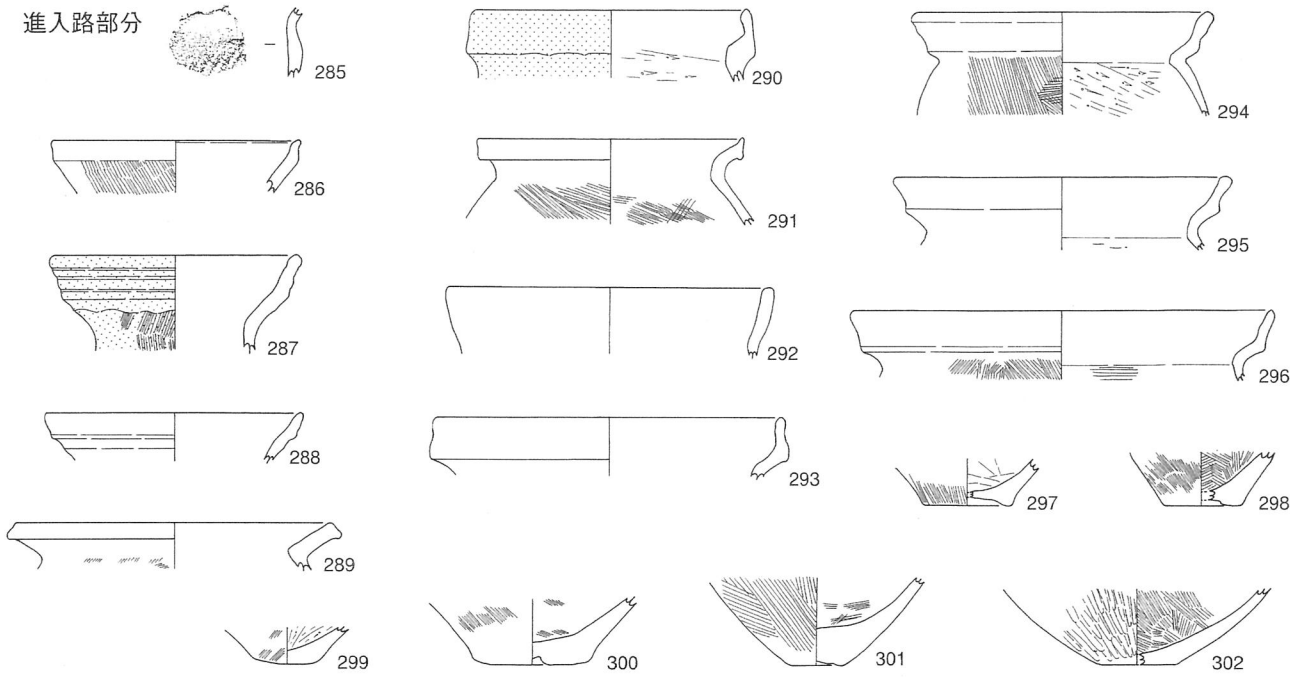
上段緩斜面



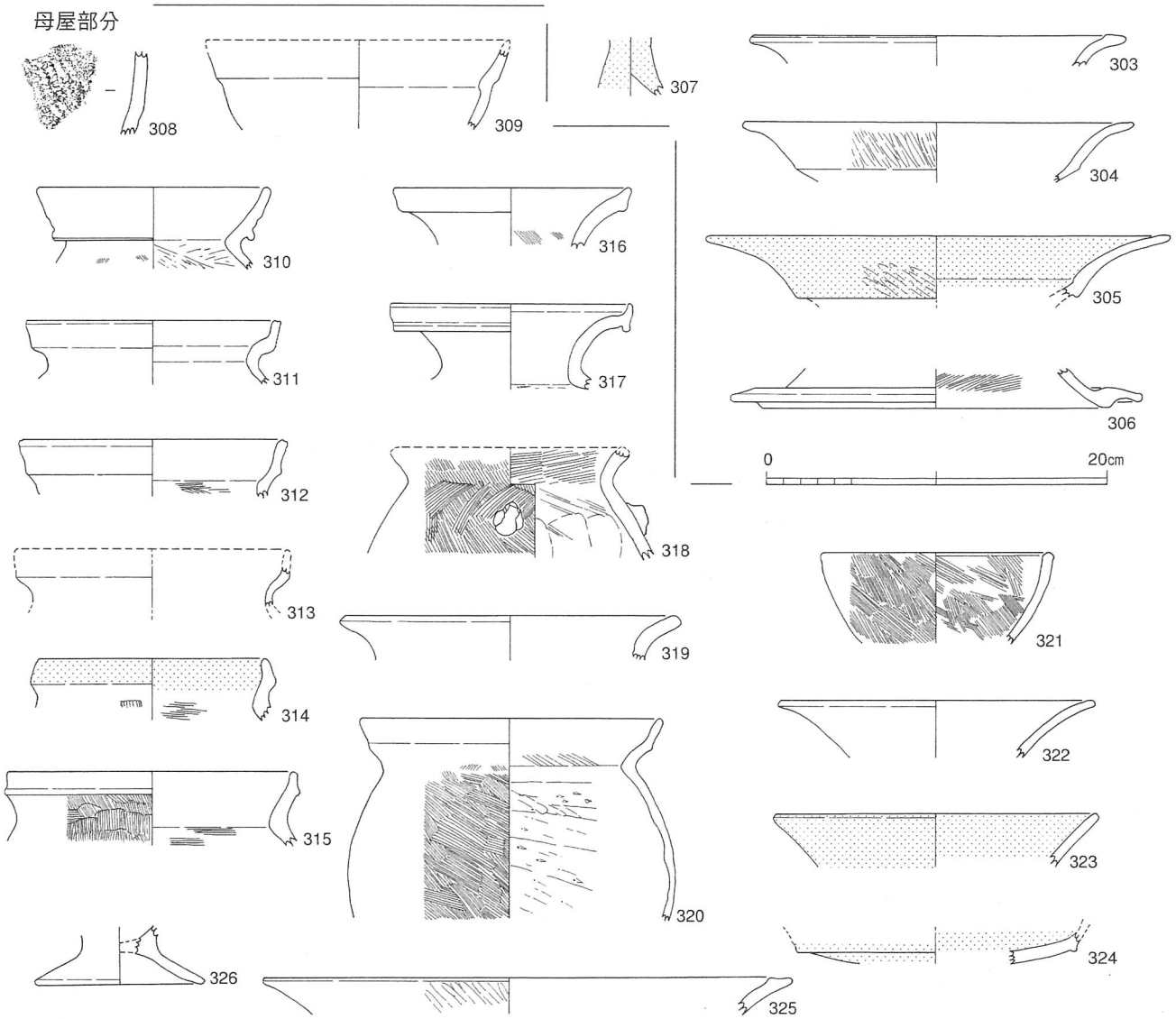
第29図 遺構外の出土遺物



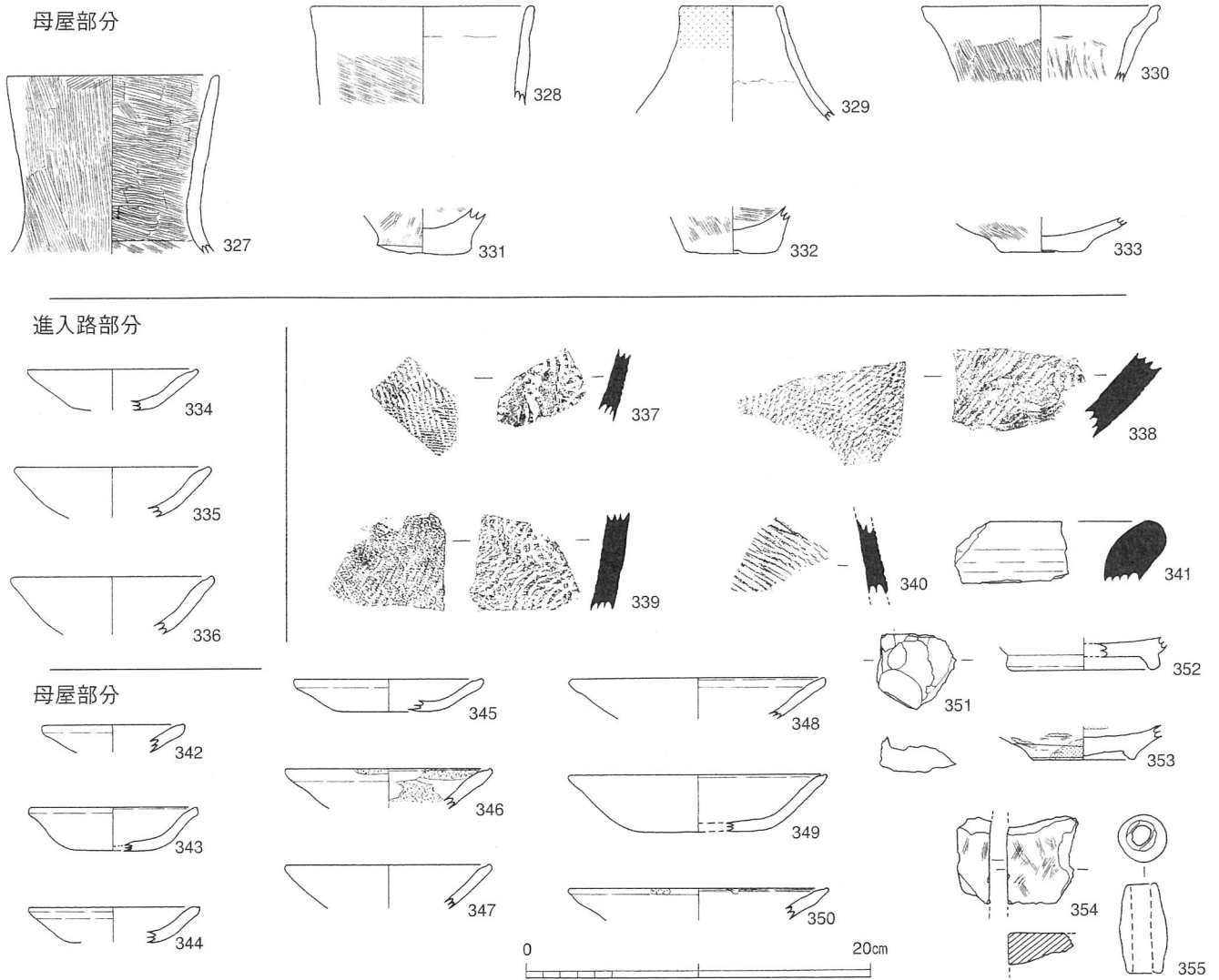
進入路部分



母屋部分



第31図 城郭盛土及び下層の出土遺物



第32図 城郭盛土及び下層の出土遺物

〈引用参考文献〉

- 魚津市教育委員会 2002『松倉城堡群発掘調査報告Ⅰ』
- 小杉町役場 1997『小杉町史 通史編』
- 財団法人富山県文化振興財団 2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告』
- 富山県井口村教育委員会 1990『井口城跡』
- 新津市教育委員会 2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』
- 福岡町教育委員会 2002『木舟城跡発掘調査報告』
- 舟橋村教育委員会 2001『仏生寺城跡発掘調査報告』
- 北陸中世考古学研究会 2002『中世北陸の城館と寺院』
- 北陸中世土器研究会 1991『城館遺跡出土の土器・陶磁器』

図版No	実測No	出土区	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	時期	備考
23	1	南北トレンチ	大溝(底面)	弥生土器	甕	14.0			口縁部1/12		
	2	〃	〃	〃	〃	16.5			口縁部1/2	法仏Ⅱ式	
	3	〃	〃	〃	〃	17.5	22.5	3.6	ほぼ完存	法仏Ⅱ式	
	4	〃	〃	〃	〃	(18.7)			口縁部1/8		近江系
	5	〃	〃	〃	〃	18.0			口縁部完存・体部1/4		
	6	〃	〃	〃	〃	12.5			口縁部1/4		外面赤彩
	7	〃	〃	〃	〃	15.3			口縁部1/3		
	8	〃	〃	〃	〃	14.4			1/2	法仏Ⅱ式	
	9	〃	〃	〃	〃	15.7			口縁部1/4		
	10	〃	〃	〃	〃	12.8			口縁部3/4		
	11	〃	〃	〃	〃	10.8	13.0	4.4	口縁部1/2・底部完存		
	12	〃	〃	〃	〃	12.3			口縁部1/2		
	13	〃	〃	〃	壺	13.7			口縁部1/8	法仏Ⅱ式	外面赤彩
	14	〃	〃	〃	鉢	13.6	5.9	1.6	完存		内外面赤彩
	15	〃	〃	〃	甕(壺)			4.1	底部完存		
	16	〃	〃	〃	〃			3.0	底部1/4		
	17	〃	〃	〃	〃			4.1	底部完存		
	18	〃	〃	〃	〃			4.2	〃		
	19	〃	〃	〃	〃			4.2	〃		
	20	〃	〃	〃	〃			5.1	底部1/2		
	21	〃	〃	〃	器台			14.7	脚部完存		穿穴4ヶ所
	22	〃	大溝(最下層)	〃	壺	14.4			口縁部1/7	法仏Ⅱ式	
	23	〃	〃	〃	〃	14.0			口縁部1/8	月影Ⅰ式	
	24	〃	〃	〃	甕	15.4			口縁部1/3	法仏Ⅱ~月影	
	25	〃	〃	〃	〃	14.8			口縁部完存	法仏Ⅱ式	
	26	〃	〃	〃	〃	15.2			口縁部7/8・体部1/4	月影Ⅰ式	
24	27	〃	〃	〃	高杯(器台)				杯部1/2		
	28	〃	〃	〃	甕	14.9	12.0	3.8	ほぼ完形		
	29	〃	〃	〃	高杯			15.7	脚部1/2		穿穴4ヶ所
	30	〃	〃	〃	甕(壺)			3.4	底部完存		
	31	〃	大溝(下層Ⅱ)	〃	高杯(器台)				杯部1/12		
	32	〃	〃	〃	高杯	(29.8)			杯部1/16		
	33	〃	〃	〃	〃	(27.4)			杯部小破片		
	34	〃	〃	〃	〃			15.8	脚部1/12		
	35	〃	〃	〃	〃			15.6	脚部1/16		
	36	〃	〃	〃	甕	15.8			口縁部1/8		
	37	〃	〃	〃	〃	17.5			〃		
	38	〃	〃	〃	〃	16.8			〃		
	39	〃	〃	〃	〃	14.4			〃		
	40	〃	〃	〃	〃	14.4			口縁部2/3・体部2/3		
	41	〃	〃	〃	甕(壺)			4.5	底部完存		
	42	〃	〃	〃	〃			5.6	底部1/4		
	43	〃	〃	〃	〃			6.0	〃		
	44	〃	〃	〃	長頸広口壺	13.2			頸部1/3完存・体部1/2		
	45	〃	〃	〃	〃				頸部1/10		
	46	〃	〃	〃	〃	14.8			頸部1/8		
	47	〃	大溝(下・中層)	〃	甕	12.9			口縁部1/4		
	48	〃	大溝(下層)	〃	〃	13.1			口縁部1/6		
	49	〃	〃	〃	〃	14.9			口縁部1/8		
	50	〃	〃	〃	〃	15.8			〃		
	51	〃	〃	〃	甕(壺)			3.6	底部1/2		
	52	〃	大溝(中層)	〃	〃			4.8	〃		
	53	〃	〃	〃	高杯(器台)	20.9			口縁部1/16		
	54	〃	〃	〃	高杯				脚上部完存		
	55	〃	〃	〃	器台				〃		穿穴4ヶ所
	56	〃	大溝(下層)	〃	甕			3.6	体部1/8・底部完		

第2表 出土遺物観察表

図版No	実測No	出土区	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	時期	備考
24	57	南北トレンチ(2T)	大溝(下・中層)	弥生土器	壺	12.7			口縁部1/8	月影I式	
	58	〃	大溝(下層)	〃	〃			5.2	体部1/4・底部2/3		
25	59	〃	斜面地(盛土)	〃	〃	8.5			口縁部1/6	法仏II式	
	60	〃	〃	〃	甕	14.9			ほぼ完存		
	61	〃	〃	〃	〃	13.6			口縁部1/7		
	62	〃	〃	〃	〃	13.8			口縁部1/16		
	63	〃	〃	〃	有孔鉢			2.4	底部完存		
	64	〃	〃	〃	〃			4.3	底部1/2		一部赤彩
	65	〃	〃	〃	鉢	13.6			口縁部1/5		
	66	〃	〃	〃	甕	15.5	23.2	3.8	完形		
	67	〃	〃	〃	(高杯)	26			(杯部)1/11		内面赤彩
	68	4トレンチ	大溝(下層)	〃	壺	12.8			口縁部1/8	法仏II式	
	69	〃	大溝	〃	〃	13.3			口縁部1/16		内外面赤彩
	70	〃	大溝(底面)	〃	〃	14.5			口縁部1/5		
	71	〃	〃	〃	甕	15.6			口縁部1/12		
	72	〃	〃	〃	〃	17.8			〃		
	73	〃	大溝(下層)	〃	〃	19.5			〃		内外面赤彩
	74	〃	大溝(底面)	〃	壺	14.4			口縁部1/5		
	75	〃	〃	〃	〃	13.2			口縁部1/4		内外面赤彩
	76	〃	〃	〃	甕	17.4	25.4	4.6	口縁部3/4 体部ほぼ完存		
	77	〃	〃	〃	壺	13.6			口縁部1/16		
	78	〃	大溝	〃	〃	11.6			口縁部1/12		
	79	〃	大溝(底面)	〃	〃	15.2			頸部1/3		
	80	〃	大溝(下層)	〃	甕(壺)			4.0	体部下半1/4		
	81	〃	大溝(底面)	〃	壺			5.6	底部1/4		
	82	〃	大溝(下層)	〃	(鉢)			3.2	〃		
	83	〃	〃	〃	〃			3.7	底部完存		
	84	〃	〃	〃	甕(壺)			3.2	〃		
	85	〃	〃	〃	〃			4.7	〃		
86	〃	〃	〃	〃			4.7	底部1/4			
87	〃	大溝(底面)	〃	〃			5.3	底部2/3			
26	88	〃	大溝(下層)	〃	壺	9.4			口縁部1/2		内外面赤彩
	89	〃	〃	〃		12.4			口縁部1/12		
	90	〃	大溝(底面)	〃		14.0			〃		
	91	〃	〃	〃		20.0			口縁部1/16		
	92	〃	〃	〃	高杯	24.8			杯部1/16		
	93	〃	〃	〃	〃	25.1			〃		
	94	〃	大溝(下層)	〃	〃	25.9			杯部1/24		
	95	〃	大溝(下層・底面)	〃	〃				杯部1/4		内外面赤彩
	96	〃	大溝(底面)	〃	〃	32.5			杯部1/16		
	97	〃	大溝(下層)	〃	〃	16.4			杯部1/5		
	98	〃	〃	〃	〃	16.2			杯部1/4	法仏	
	99	〃	〃	〃	〃	18.6			杯部1/16		内外面赤彩
	100	〃	〃	〃	〃	11.2			口縁部1/5		
	101	〃	大溝(上層)	〃		15.6			杯部1/8	法仏	内面赤彩?
	102	〃	大溝(下層)	〃	高杯	18.0			〃	〃	
103	〃	〃	〃	〃	11.6			杯部1/2	法仏II以降	金沢市西念IV	
104	〃	〃	〃	〃				杯部1/16 脚上部ほぼ完存		孔数不明	
105	〃	〃	〃	(器台)				脚上部完存		孔数4ヶ所?	
106	〃	〃	〃	〃				脚部1/4	法仏II		
107	南北トレンチ(2T)	大溝	〃	器台(高杯)			15.8	脚部1/12	〃		
108	4トレンチ	〃	〃	高杯	7.8		20.8	脚部1/3		孔数不明	
109	〃	(上段平坦面)	中世土器	皿	9.0	1.5		口縁部1/5	15世紀末	上層	
110	1トレンチ	(上段斜面)	〃	〃	9.6	2.2		口縁部1/2	16世紀後半	タール付着	
111	〃	〃	〃	〃	10.0			口縁部1/4	〃	〃	
112	〃	〃	〃	〃			2.1	口縁部1/8・底部1/4	〃		

図版No	実測No	出土区	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	時期	備考
26	113	1 トレンチ	(上段平坦面)	中世土師器	皿	10.0			口縁部 1/8	16世紀後半	
	114	〃	(上段斜面)	〃	〃	11.7			口縁部 1/16		
	115	5 トレンチ		〃	〃	12.8			口縁部 1/12	15世紀末	上層
	116	1 トレンチ	(上段平坦面)	〃	〃	12.9			口縁部 1/10	16世紀後半	
	117	〃	〃	〃	〃	14.0	2.6		口縁部 1/5	〃	X26Y102層出土と接合
	118	〃	〃	〃	〃	14.2	2.8		口縁部 1/3	〃	
	119	3 トレンチ	(二の丸付近)	〃	〃	17.5			口縁部 1/16	〃	
	120	1 トレンチ	(上段平坦面)	〃	〃	17.7			〃	〃	
	121	〃	〃	〃	〃	17.9			口縁部 1/24	〃	
	122	〃	(上段斜面)	越中瀬戸	すり鉢	31.0			口縁部 1/6	17世紀前半	
	123	〃	(上段平坦面)	不明	碗			4.2	底部 1/4	19世紀	
	124	〃	〃	唐津					小破片	17世紀後半-18世紀	
27	125	上段平坦面(下層)	SK43	弥生土器	甕	13.5			口縁部 1/20		
	126	〃	SK43	〃	〃	16.1			口縁部 1/4		
	127	〃	SK43	〃	甕(壺)			4.0	底部 1/4		
	128	〃	SK43	〃	高杯(器台)				杯部 1/8		
	129	〃	SK43	〃	高杯			13.4	脚部 1/8		
	130	〃	SK03	〃	甕	13.0			口縁部 1/7		
	131	〃	SK03	〃	〃	14.4			口縁部 1/4		
	132	〃	SK03	〃	甕(壺)			2.4	底部完存		
	133	〃	SD49	〃		12.8			口縁部 1/6		
	134	〃	SD49	〃	鉢	15.2			口縁部 1/7		
	135	〃	SD49	〃	甕(壺)			4.6	底部 1/5		
	136	〃	SX17	〃	壺	13.8			口縁部 1/8		
	137	〃	SX17	〃	甕	16.9			口縁部 1/7		
	138	〃	SX17	〃	高杯(器台)			22.6	脚部 1/16		
	139	〃	SX29	〃	甕	13.3			口縁部 1/8		
	140	〃	SK06	〃	小型土器	4.2			口縁部 1/5		
	141	〃	SK06	〃	鉢				口縁部 1/11		
	142	X34Y33	SK04	〃	高杯				脚上部完存		サブトレンチ1
	143	上段平坦面(下層)	SD48	〃	壺				小破片		
	144	〃	SX56	須恵器	杯	12.6	3.7		口縁部 1/5		
	145	〃	SD37	弥生土器	高杯				脚部 1/8		
	146	〃	SX16	中世土師器	皿	11.8			口縁部 1/9		
	147	〃	SX16	〃	〃	11.9			口縁部 1/12		
	148	〃	SX16	〃	〃	12.2			口縁部 1/10		
149	〃	SX16	〃	〃	12.7			口縁部 1/16			
150	〃	SX16	〃	〃	12.8			口縁部 1/4			
151	〃	SX16	〃	〃	12.9	1.8		口縁部 1/8			
152	〃	SX16	〃	〃	12.8			〃			
153	〃	SX16	〃	〃	14.9			口縁部 1/10			
154	〃	SX16	〃	〃	15.7			口縁部 1/16			
155	〃	SX16	〃	〃	15.9			〃			
156	〃	SX16	〃	〃	16.5			口縁部 1/14			
157	〃	SX16	〃	〃	16.6			口縁部 1/12			
158	〃	SX16	〃	〃	16.5	2.95		口縁部 1/16			
159	〃	SX16	〃	〃	16.7	(3.3)		口縁部 2/5			
160	〃	SX16	〃	〃	16.8	2.8		口縁部 1/14			
161	〃	SX16	〃	〃	17.9			口縁部 1/12			
162	〃	SX16	〃	〃	17.6			〃			
28	163	上段斜面	SD02	〃	〃	11.9			口縁部 1/8		
	164	〃	SD02	〃	〃	12.6			〃		
	165	〃	SD02	〃	〃	14.9			口縁部 1/14		
	166	〃	SD02	〃	〃			9.0	底部 1/4		
	167	上段平坦面	SD13	〃	〃	11.6			口縁部 1/6		
	168	〃	SD05	〃	〃	12.8			口縁部 1/4		

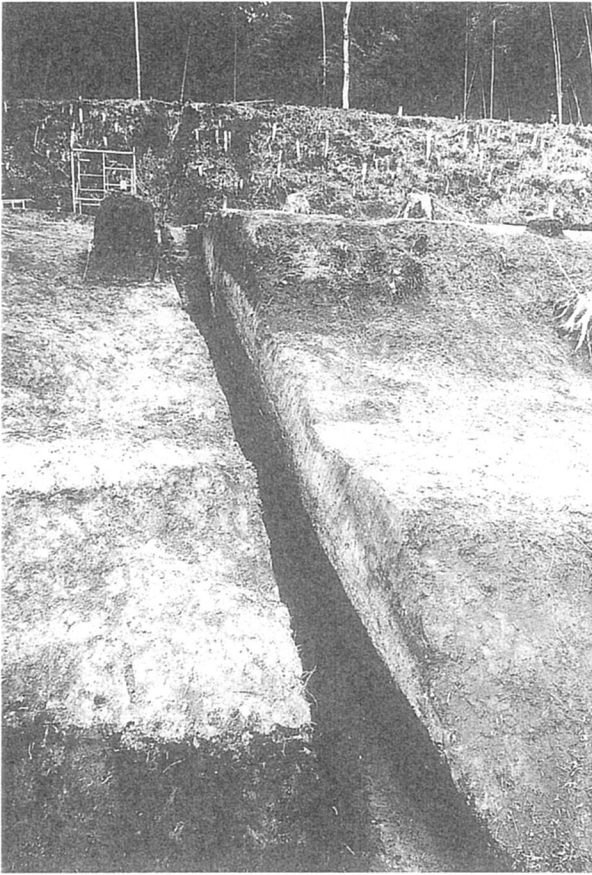
図版No	実測No	出土区	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	時期	備考
28	169	上段平坦面	SK47	中世土師器	皿	10.8			口縁部 1/12		
	170	〃	SK47	〃	〃	14.2			口縁部 1/8		
	171	〃	SD31	金属製品	刀子						覆土内
	172	〃	SK33	〃	〃	17.9			口縁部 1/20		
	173	上段切岸	X25Y18 X37Y28	須恵器	壺				破片		
	174	〃	X37Y28	中世土師器	皿	9.8			口縁部 3/8		
	175	〃	X38Y28	〃	〃	11.0			口縁部 1/12		
	176	〃	X37Y28	唐津	碗	14.0			口縁部 1/8	17世紀前半	内外面釉
	177	〃	X37Y28		花瓶				上部 1/3	19世紀以降	外面釉
	178	〃	X37Y27		硯				2/3	近世以降	
	179	上段平坦面	X27Y11	弥生土器		13.0			口縁部 1/10		内外面赤彩
	180	〃	X22Y12	〃	甕	14.0			口縁部 1/6		
	181	〃	X23Y11	〃	〃	14.2			口縁部 1/7		
	182	〃	X23Y 9	〃	〃	20.3			口縁部 1/14		
	183	〃	X22Y12	〃	〃	24.0			口縁部 1/15		
	184	〃	X31Y23	〃	壺	28.4			口縁部 1/8	法仏Ⅱ式	
	185	〃	X24Y 8	〃	浅鉢	9.0			口縁部 1/4		
	186	〃	X23Y 9	〃	〃	11.5			〃	法仏Ⅱ式	
	187	〃	X27Y 9	〃				5.9	底部完存		
	188	〃	X22Y12	〃				3.1	底部 1/2		
	189	〃	X23Y11	〃				2.4	〃		
	190	〃	X23Y11 X22Y12	〃				6.2	体部 1/8 底部完存		
	191	〃	X31Y22	〃	高杯	35.0			杯部 1/32		内面赤彩
	192	〃	X23Y11	〃	〃				杯部 1/5		
	193	〃	X24Y 8	〃	〃			15.6	脚部 1/5		
	194	〃	X25Y10	〃	〃			16.0	脚部 1/8		
	195	〃	X27Y 8		把手				完存		
	196	〃	X27Y19	須恵器					小破片		
197	〃	X24Y11	珠洲					〃			
198	〃	X31Y19	土師器	碗			4.8	底部 1/12			
199	〃	X27Y 9	〃	〃			4.3	底部 1/8			
200	〃	X31Y19	〃	〃			7.0	底部 1/4			
29	201	〃	X23Y 9	中世土師器	皿	8.9			口縁部 1/6		
	202	〃	X27Y10	〃	〃	9.5			口縁部 1/10		
	203	〃	X26Y10	〃	〃	12.3			口縁部 1/8		
	204	〃	X24Y13	〃	〃	12.5	2.75		1/4		
	205	〃	X26Y20	〃	〃	12.5			口縁部 1/9		
	206	〃	X26Y10	〃	〃	12.9			口縁部 1/10		
	207	〃	X27Y 9	〃	〃	13.5			〃		
	208	〃	X27Y11	〃	〃	13.8			口縁部 1/12		
	209	〃	X32Y20	〃	〃	14.4			口縁部 1/8		
	210	〃	X29Y25	〃	〃	15.8			口縁部 1/16		
	211	〃	X26Y 8	〃	〃	16.8			〃		
	212	〃	X24Y13	〃	〃	17.1			口縁部 1/8		
	213	〃	X26Y 8	〃	〃	17.6	3.0		1/2		
	214	〃	X26Y 8	〃	〃	17.6	3.3		1/4		
	215	〃	X24Y13	〃	〃	17.8			口縁部 1/24		
	216	〃	X26Y10	〃	〃	17.8			口縁部 1/12		
	217	〃	X26Y 8	〃	〃	17.8			口縁部 1/8		
	218	〃	X22Y12	珠洲	甕				小破片	15世紀	珠洲Ⅴ期
	219	〃	X32Y20	〃	〃				〃		
	220	〃	X27Y16	越中瀬戸	皿				〃	17世紀前半	
	221	〃	X27Y11	肥前磁器	碗	9.1			口縁部 1/7	17世紀後半以降	鶴文あり
	222	〃	X25Y12	瀬戸美濃	皿	10.0			1/4	16世紀後半	

図版No	実測No	出土区	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	時期	備考	
29	223	上段平坦面(下層)	X19Y19-20	越中瀬戸	皿	10.8	2.6	3.8	1/5	17世紀前半	内外面釉	
	224	〃	X27Y 9	肥前磁器		12.0			口縁部 1/8		内面絵付け?	
	225	〃	X27Y19		火舎				底部 1/5		中世と思われる	
	226	〃	X23Y11		瓦				小破片	近世以降		
	227	〃	X27Y10	越中瀬戸	匣鉢	12.6			1/8		容器に転用	
	228	〃	X29Y25	越中瀬戸?	〃			(14.0)	底部 1/10			
	229	〃	X31Y19	肥前系磁器	瓶	3.8			口縁部 1/3	19世紀以降		
	230	〃	X29Y25	越中瀬戸?	土錘	2.4			1/2	18世紀後半~19世紀	3層上面・内外面釉	
	231	〃	X24Y13	石製品	硯						砥石に転用	
	232	〃	X24Y11	〃	砥石						〃	
	233	〃	X27Y 9	〃	〃						〃	
	234	〃	X27Y 9	土製品								
	235	〃	X28Y24	金属製品	簪						[刺繍に葛紋]の家紋あり	
	236	上段緩斜面(下層)	X33Y29	青磁	碗	16.3			口縁部 1/20	14世紀後半~15世紀		
	237	〃	X33Y29	珠洲	壺			9.7	底部 1/4			
	238	〃	X28Y32		瓦					近世以降	サブレンチ 2	
	239	〃	X29Y27	瀬戸美濃	天目茶碗	9.8			口縁部 1/8		錆釉	
	240	〃	X32Y34	〃	〃	11.6			口縁部 1/12	16世紀後半	内外面釉	
	241	〃	X29Y27	唐津	皿	12.0			口縁部 1/20	17世紀後半~18世紀	内の山	
	242	〃	X34Y25	〃	碗			4.8	底部ほぼ完存・脚部1/6	〃		
	243	上段平坦面(下層)	X27Y16									
	30	244	中段切岸(下層)	X19・20Y14・15	弥生土器	壺	17.8			口縁部 1/12		
		245	〃	X19・20Y14・15	〃	甕(壺)			4.2	底部 1/2		
		246	〃	X19・20Y14・15	〃	〃			5.3	2/9		
247		〃	X25Y19	〃	高杯				杯部 1/12			
248		〃	X25Y18	〃	〃				脚上部完存			
249		〃	X27Y25	須恵器	杯身	13.6			口縁部 1/12			
250		〃	X27Y29	〃	〃			8.9	底部 1/4			
251		〃	X27Y25	中世土師器	皿	10.8	3.0		1/4			
252		〃	X24Y29 X25Y18	〃	〃	11.9			1/3		タール付着	
253		中段平坦面(下層)		弥生土器	高杯	31.8			杯部 1/24			
254		〃	X17Y17	〃	壺	11.5			口縁部 1/8		内外面赤彩	
255		〃		須恵器				17.7	底部 1/12			
256		〃	X24Y21	中世土師器	皿	17.9			口縁部 1/24		タール付着	
257		〃	X17Y17	越中瀬戸?					小破片	19世紀		
258		〃	X24Y21	鉄滓	流出滓							
259		〃		越中瀬戸?	匣鉢			9.4	底部 1/7		内外面釉	
260		東側斜面	X25Y27	中世土師器	皿	8.0			口縁部 1/8			
261		〃	X24Y29	〃	〃	8.45	1.5		口縁部 1/6			
262		〃	X25Y27	〃	〃	9.4			口縁部 1/8			
263		〃	X24Y27	〃	〃	9.8			口縁部 1/16			
264		〃	X24Y27	〃	〃	9.8			口縁部 1/8		タール付着	
265		〃	X24Y27	〃	〃	10.9			口縁部 1/10			
266		〃	X24Y27	〃	〃	11.6			口縁部 1/16			
267		〃	X25Y27	〃	〃	12.1			〃			
268		〃	X24Y27	〃	〃	17.0			口縁部 1/24			
269		〃	X24Y27					5.3	底部 1/6			
270		〃	X25Y27		仏飯			3.8	杯部下完存・脚部先3/4	19世紀以降	在地産	
271	〃	X22Y26	唐津		13.3			口縁部 1/16		内の山		
272	〃	X22Y26	越中瀬戸	皿			4.6	底部 1/4				
273	〃	X21Y28	石製品	砥石?								
274	下段平坦面(下層)	X20Y19	須恵器	杯身	12.6	2.9		1/5				
275	〃	X21Y20-21	中世土師器	皿	10.0			口縁部 1/12				
276	〃	X21Y20-21			9.9			〃		内外面釉		
277	〃	X21Y20-21		すり鉢	35.6			口縁部 1/16				

図版No	実測No	出土区	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	時期	備考
30	278	サブトレンチ2	X28Y32	弥生土器	甕(壺)			4.5	底部2/3		
	279	〃		〃					杯部1/8		
	280	〃		〃	高杯	21.7			杯部1/12		
	281	排土		〃	壺	16.1			口縁部1/12		
	282	〃		〃	高杯	22.6			杯部1/24		内外面赤彩
	283	〃		須恵器	甕				破片		
	284	〃		中世土師器	皿	7.7			口縁部1/6		
31	285	上段平坦面	X20-21Y11-12	縄文土器					破片		
	286	中段切岸盛土下	X19-20Y13	弥生土器	壺	12.9			口縁部1/10		
	287	〃	X19Y19	〃	〃	12.8			口縁部1/5		外面赤彩
	288	〃	X19Y11-12	〃	〃	13.4			口縁部1/9		
	289	南北トレンチ		〃	甕(壺)	16.4			口縁部1/6		
	290	上段平坦面盛土下	X20-21Y11-12	〃	〃	14.2			口縁部1/8		外面赤彩
	291	中段切岸盛土下	X20Y11-12	〃	〃	13.9			口縁部1/6		
	292	上段平坦面盛土下	X22Y14-15	〃	〃	17.0			口縁部1/16		
	293	〃	X20-21Y11-12	〃	〃	18.1			口縁部1/6		
	294	中段切岸盛土下	X24Y24	〃	甕	15.0			口縁部1/3		一部赤彩
	295	〃	X19Y11-12	〃	〃	17.4			口縁部1/6		
	296	上段平坦面盛土下	X22Y14-15	〃	〃	22.1			口縁部1/10		
	297	〃	X20-21Y10	〃	甕(壺)			4.6	底部2/5		
	298	中段切岸盛土下	X19Y11-12	〃	〃			4.1	底部1/2		
	299	〃	X19-20Y13	〃	〃			3.3	完存		
	300	上段平坦面盛土下	X22Y14-15	〃	〃			6.1	底部1/2		
	301	〃	X23-24Y13-14	〃	〃			2.8	底部2/3		
	302	〃	X23-24Y13-14	〃	〃			3.8	体部1/6・底部1/2		
	303	中段切岸盛土下	X19Y14	〃	高杯	19.8			杯部1/16		
	304	上段平坦面盛土下	SK87	〃	〃	22.5			杯部1/5		
	305	〃	X23-24Y13-14	〃	〃	26.4			杯部1/12		内外面赤彩
	306	〃	X20-21Y11-12 X22-23Y10	〃	〃			20.2	脚部1/8		〃
	307	〃	X23-24Y13-14	〃	〃				脚部完存		外面赤彩
	308	〃	X28Y22	縄文土器					破片		
	309	〃	X25Y20	弥生土器	鉢				口縁部1/14		
	310	〃	X26Y18	〃	壺	13.2			口縁部1/5		
	311	〃	X25Y20	〃	甕(壺)	14.4			〃		
	312	〃	X29Y25	〃	〃	15.1			口縁部1/10		
	313	〃	SK71	〃	〃				口縁部1/16		
	314	〃	X23Y22	〃	壺	13.2			口縁部1/8		口縁部先端赤彩
	315	〃	SX16B	〃	甕(壺)	16.6			口縁部1/11		断ち割り
	316	〃	X25Y23	〃	壺	13.6			口縁部1/12		
	317	〃	X24Y18-19	〃	〃	14.0			口縁部1/4		
	318	〃	X26-27Y20	〃	甕	(13.0)			口縁部わずか・体部1/4		
	319	〃	X26Y18	〃	〃	19.0			口縁部1/16		
	320	〃	X28Y22	〃	〃	17.4			口縁部完存・体部1/5		
321	〃	X28Y22	〃	鉢				口縁部1/6			
322	〃		〃	高杯	18.1			杯部1/8			
323	〃	X28Y22	〃	〃	18.8			〃		内外面赤彩	
324	〃	X28Y22	〃	〃				〃		〃	
325	〃	X26-27Y20	〃		30.7			杯部1/24			
326	〃	X29Y27	〃	壺蓋	9.5			口縁部1/8			
32	327	〃	X27-28Y24 X28Y22	〃	壺	12.1			口縁部1/2		一括
	328	〃	X25Y20	〃	〃	12.8			口縁部1/4		
	329	〃	X26Y19	〃	〃	5.7			口縁部1/2		口縁部外面赤彩
	330	〃	X26-27Y20	〃	〃	13.4			口縁部1/14		
	331	〃	X20-21Y11-12	〃	甕(壺)			5.5	底部完存		

図版No	実測No	出土区	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	時期	備考
30	332	上段平坦面盛土下	X25Y20	弥生土器	甕(壺)			5.3	底部 1/2		
	333	〃	X26・27Y20	〃	〃			4.7	〃		
	334	〃	X20Y12	中世土師器	皿	9.6			口縁部 1/9		
	335	中段平坦面盛土下	X19Y15	〃	〃	11.1			口縁部 1/7		
	336	上段平坦面盛土下	X23Y11・12	〃	〃	11.3			口縁部 1/8		
	337	中段切岸盛土下	X27Y25・26	須恵器	甕				破片		
	338	下段切岸下	X21Y18	〃	〃				〃		
	339	〃	X21Y18	〃	〃				〃		
	340			珠洲	〃				〃		東西壁面
	341	中段切岸下	X27Y25・26	須恵器	〃				〃		
	342	上段平坦面盛土下	X29Y26	中世土師器	皿	8.0			口縁部 1/6		
	343	〃	X25Y23	〃	〃	9.6	2.5		1/4		
	344	〃	X25Y23	〃	〃	9.8			口縁部 1/6		
	345	〃	X28Y25	〃	〃	10.8	1.85		〃		
	346	下段切岸下	X21Y18	〃	〃	11.9			口縁部 1/5		タール付着
	347	〃	X23Y21	〃	〃	11.9			口縁部 1/7		
	348	上段平坦面盛土下	X29Y27	〃	〃	14.7			口縁部 1/13		
	349	中段切岸下	X25Y20	〃	〃	11.4	3.3		1/5		
	350	上段平坦面盛土下	X26・27Y20	〃	〃	15.0			口縁部 1/14		タール付着
	351	下段切岸下	X21Y18	鉄滓						古代	
	352	中段切岸下	X25Y20	土師器?				8.1	底部 1/8	古代?	
	353	下段切岸下	X21Y18	越中瀬戸	皿			5.8	底部 1/2	17世紀頃	
	354	排土		石製品	砥石						
	355	〃			土錘				完存	近世	産地不明





南北トレンチ(本発掘調査後の様子)



南北トレンチ(上段切岸部分)



南北トレンチ(下段平坦地部分)



1トレンチ(西から)



3トレンチ(北西から)



4トレンチ(大溝掘削の様子)



南北トレンチ(大溝底面付近の弥生土器出土状況)



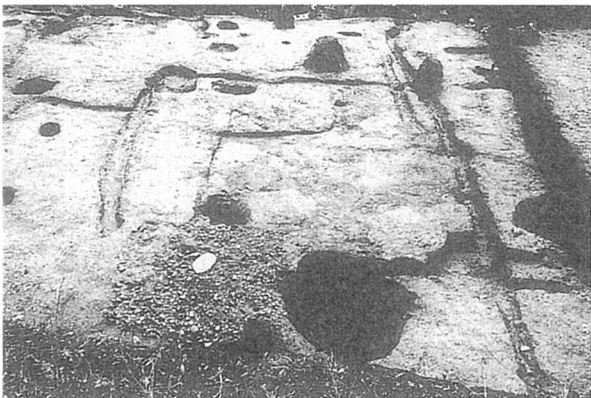
発掘区近景(南西から)



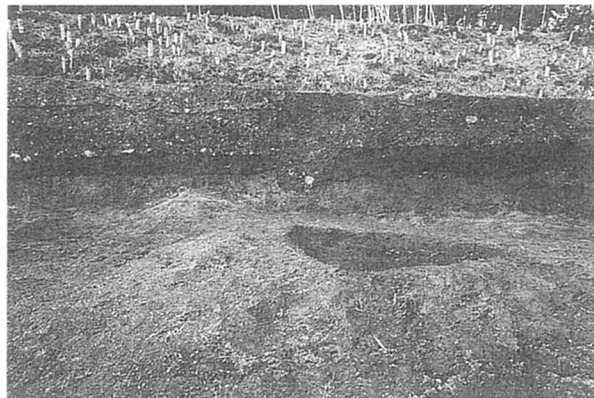
上段切岸発掘区(東南から)



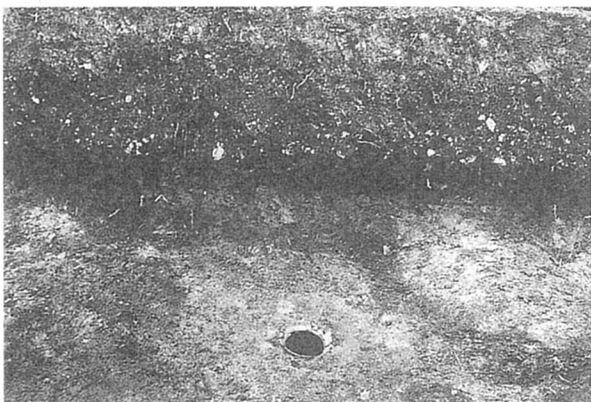
二の丸付近の発掘区(北西から)



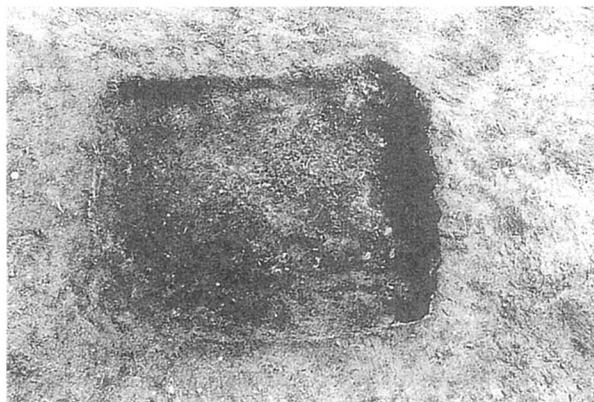
上段平坦面の集積遺構(SX17)



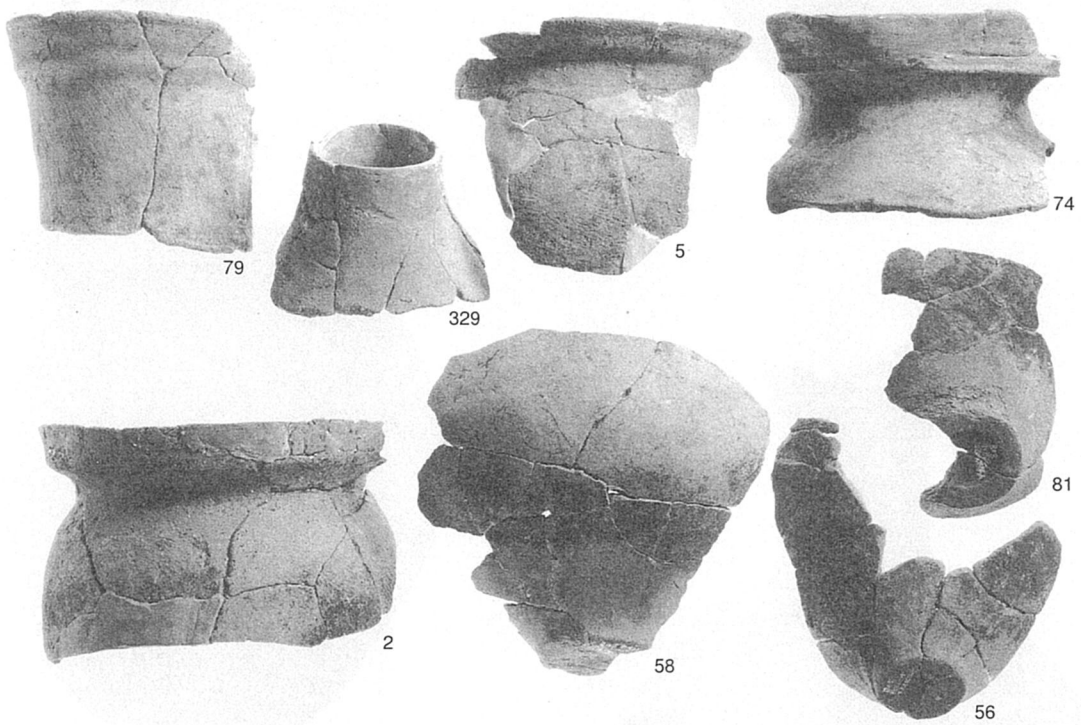
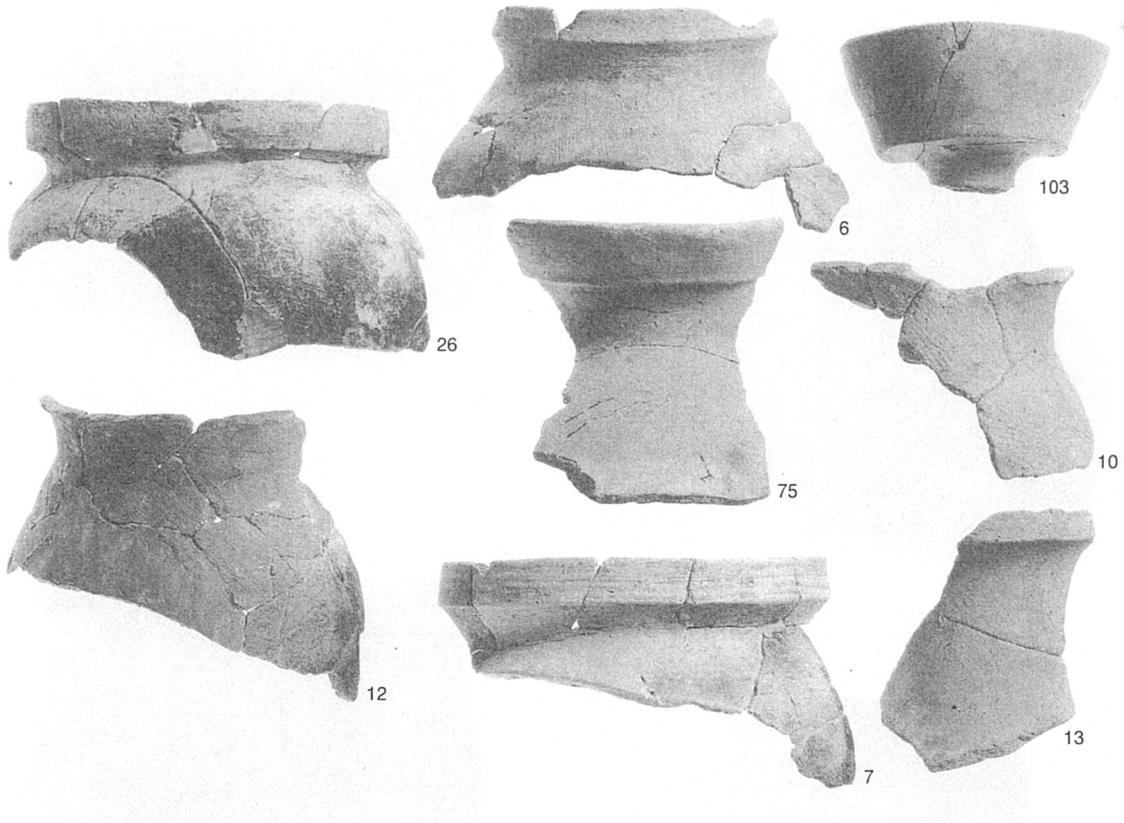
上段平坦面築城時の盛土の様子

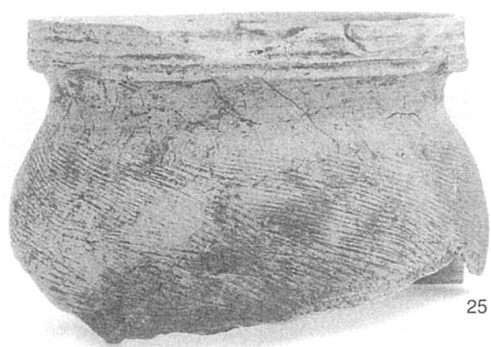
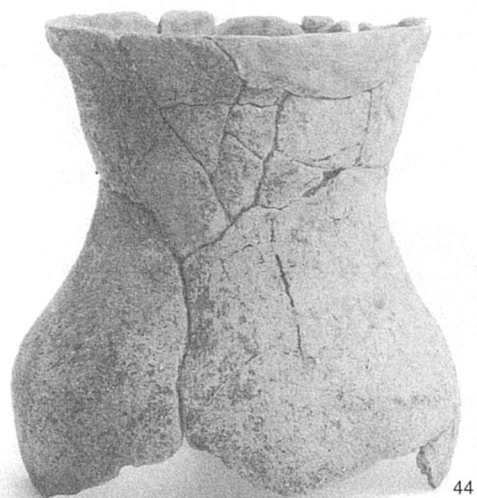


城郭下層の土器出土状況



下層検出の焼壁土坑(SK72)







14



28



76



3



66

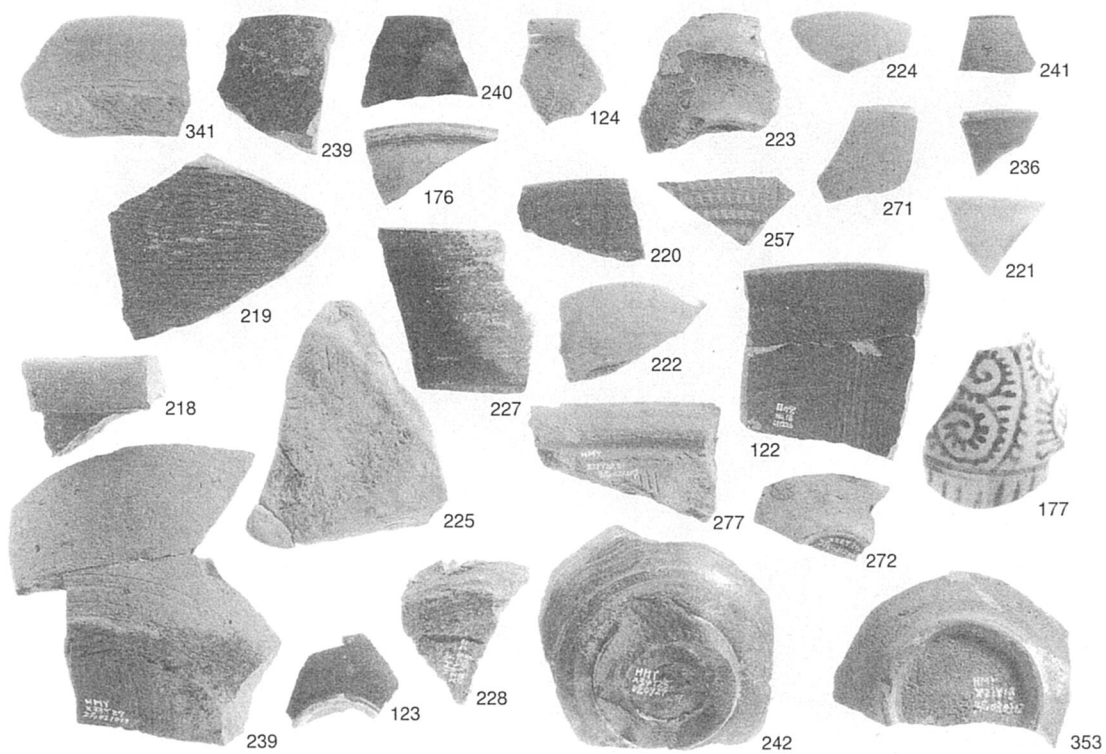


60



171





平成 15 年 3 月 31 日 発行

日宮城跡発掘調査概要

— 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財調査 —

編 集 小杉町教育委員会
発 行 〒939-0393 富山県射水郡小杉町戸破1511
TEL 0766-56-1511
印 刷 日興印刷株式会社

